

特 集
読書案内

書評

第99号

1992.4.3

書評編集委員会

特集●読書案内

『書評』編集委員会より	田中 俊也(文学部教員)	4
ありのままのあり		
「いやなら読むな。されど……」	野村 幸正(文学部教員)	8
自己主張と独断	元木 久(経済学部教員)	10
考えるな、見よ	若森 章孝(経済学部教員)	12
辞書を常に座右に	永沼 博道(商学部教員)	14
商学部4年間で読んだらよいと思う本	羽原 敬二(商学部教員)	16
〈おたく論〉のすすめ	岩見 和彦(社会学部教員)	18
遊びのススメ	山本 準(社会学部教員)	20
旅の中の旅	吉田 栄二(法学部教員)	22
マンガ、またはマルクス・フロイト	若田 恭二(法学部教員)	24
「どこでもドア」を開く楽しみ	馬場 昌子(工学部教員)	26

投稿

『現代思想の快楽』そのⅣ	松原 恵二	29
最終回『読書の快楽のすすめ』〈短評編でわかりやすく〉		
鏡花の「夜行巡査」「外科室」あたり	平野 達也	36

連載

おいてけぼり——宮本輝試論 X 芝田 啓治 44

在日韓国・朝鮮人の教育問題ノート XV 梁 永厚 52

日本人教師と在日朝鮮人子女の教育 山村 嘉巳 74

研究余滴 象徴主義 8 山村 嘉巳 74

第3章 象徴主義運動 I その運動の周囲 山村 嘉巳 74

日本中国ことばの来往 ゆきま その44 芝田 稔 83

「漢字統一」へのアドバルーン

短評

『デモと自由と好奇心と』 福富 節男 (第二書館) 92

羅針盤 2

お知らせ 39

・短評募集 2

・「書評」編集委員募集 90

・98号のおわびと訂正 91

・組織部主催新入生歓迎行事紹介 94

編集後記

題字 ■ 網干善教 (文学部教員)



『出題される問題は毎年同じなのでコピーが出廻っており、僕は隣に座った奴から聞き出したその答えをそのまま解答用紙に書きこめばいいだけだった。(ティーンエイジ・サマー／鷺沢萌)』

小説にさえ、日常の風景としてえがかれる、大学の試験スタイルの現実がこれである。関西大学も例外ではなく、毎年同じ試験問題、テキスト、板書、ひどい時には大学前で売られている講義ノートを教授が使つての講義が存在する。新入生なら初めて目にする、四月七日の授業開始での立見の講義。そして五月以降徐々に学生数は減少し、試験期間になると、通常一教室が三教室に増えるのだ。だからと言って私は、講義さえ出れば良い、出席しなければならぬ、などと言うつもりはない。つまらない講義に出るよりは、自分のやりたい事をやる、読みたい本を読む方がよっぽど為になる。

しかし、である。年間七〇万円ちかい学費(新入生は十二五万円)を払っているのに、受ける講義が、あまりにもお粗末すぎる。情報処理機器がいくら増えても、その他の、あるいはベースとなる講義は何ら改善されてはいない。その上、今年は商学部^{ブラス}の五〇〇人にも及ぶ追加合格の発表である。そこまでして、学生を集める必要がどこにあるのだろうか。

大学は「最高学府」であり、「学問探求」の場だと言われている。これはいわば「幻想」「理想」である。他方では、「レジャーランド化」「通過地点」と邪喻されている。これらは、大学の裏と表であり、その差はますます拡大している。

私自身、大学に入学した時の印象は、「何故こんなに誰も勉強しないのか」という事であり、教授がひどく遠く感じられた。それは今でも差して変っていない。

大学とはどういう所なのだろうか。大学を卒業すれば、そこそこの企業には就職できる。そして学生時代には、「学生」というだけで、何をやっても、割合許されている。しかし、一方では国家―独占資本による大学再編が進められている。大学での講義はより専門化され、企業との関係は密になっていく。つまり、「就職予備校」としての役割が強化されているのだ。「高級労働力再生産の場」と位置付けられ、誕生した大学は九〇年代に入って、その役割を強化し、より一層の細分化⇨偏差値による大学の階層化を強めている。

そして、そこに存在する我々学生はどうあるべきか。

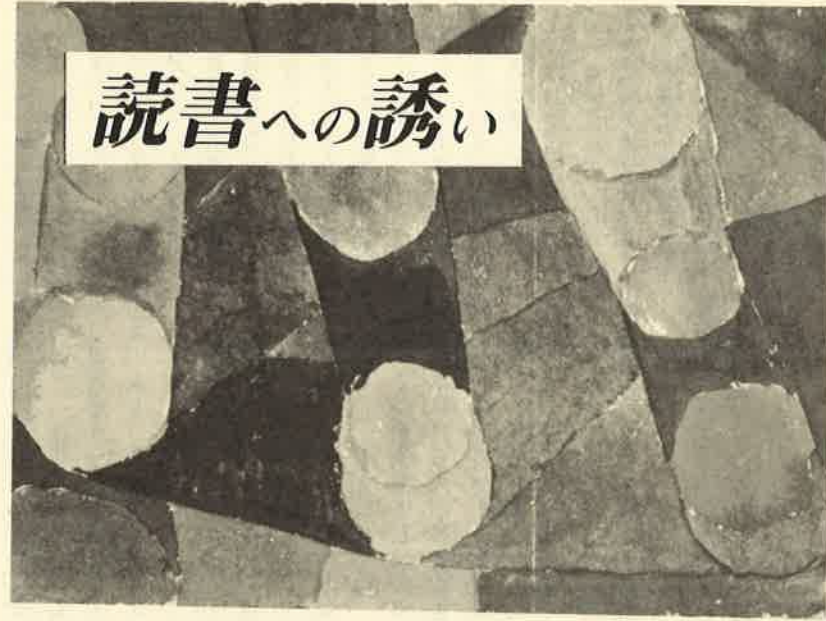
まず、大学とはどういう所なのか、という事を捉え返すべきだろう。我々学生の多くは、卒業すれば、一生「労働者」として働き続けることになる。卒業までの四年間

(あるいはそれ以上)は、「就職」に備える為の期間や、それまでの「執行猶予」として遊びたおす期間でもないのではないか。学問研究、サークル、バイトや遊びに没頭するのを否定はしない。しかし、「私は何の為にそれをするのか」を捨象した所で、自分のものとはならない。「大学へ入る」「学生になる」というのは、自ら選んだ道である。様々な選択肢の中で選んでいるのである。

大学では、講義をさぼろうが、試験をさぼろうが、誰にもおこられることはない。だからこそ、自分の中の軸をしっかりと持っていないと、流れていくように、日々は過ぎていく。今、自分はどこに存在基盤を持っているのか、そのような生き方をするのか、どのような考え方⇨イデオロギーを持っているのか……。

つまり、大学での「自由」というのは、誰にも規制されることなく、自分の生き方、思想を確立させる「自由」なのだ。社会と自分、社会と大学、大学と自分、他者と自分、様々な関係の中で「自分が自分として」生きる事を見つけるのが大学ではないだろうか。

読書への誘い



ムダは
“美学”だ!!

私事で恐縮ですが、中学生の時読んだ本は教科書を除けば、「ピルマの竖琴」と「一五少年漂流記」の二冊だけでした。高校に至っては一冊も読みませんでした。多感な一〇代にこれ程本を読まない人間も珍しいだろうと思います。それが今、新入生の皆さんに読書への誘いをしようとしているのです!

当誌「書評」の編集委員会に入ってから、中学・高校の六年間で読んだ本の数十倍を上回る数をこの三年間に読みました。今思えば、本が嫌いだというよりは、むしろ本自体に対するキツカケがなかった、あるいは強制的だったの

読書案内

田中 俊也…………… 6 (文学部教員)	岩見 和彦…………… 18 (社会学部教員)
野村 幸正…………… 8 (文学部教員)	山本 準…………… 20 (社会学部教員)
元木 久…………… 10 (経済学部教員)	吉田 栄二…………… 22 (法学部教員)
若森 章孝…………… 12 (経済学部教員)	若田 恭二…………… 24 (法学部教員)
永沼 博道…………… 14 (商学部教員)	馬場 昌子…………… 26 (工学部教員)
羽原 敬二…………… 16 (商学部教員)	

だろうと思います。

これからの四年間は無限の広がりを持つ可能性であるといえます。その中で蓄えていく知識は、社会で役に立つ、立たないという価値基準を超えて、生活の活動源となりうるはずです。

本には一個人のあるいは複数の考えが色々な経験に基づき、どんな形であれ表現されています。その作者や筆者の表現したいところ、つまりは主張ですね、そこを読み取り、それに対して自分なりの考えを持つ、それができてはじめて本のおもしろみが分かってくるのではないのでしょうか。

「ムダな本を読むな！ 時間がムダだから」とたまに聞きますが、そんなことはありません。「ムダは美学だ」と元京大教員、森毅氏調に本を読むことをおすすしめしつつ、筆を置くことにしましょう。

ありのままのあり

田中俊也

たなか としや
文学部教員
心理学専攻

「ありのままに生きようとしたあ
りは、ありのままに生きようとした
ありは……ありのままだった。」と
いう駄洒落の歌（？）がもう一五年
かそれ以上前にあった。自分の人生
をあるがままに生き抜こうとした一
匹の蟻が、蝶にもトンボにもなれず
結局は蟻のまままで終わった、とい
うそれは悲しいお話である。

ありのままの人生とか、ありのま
まの事実という言葉をよく使う。何
等粉飾やゆがみのない、自然で純粹
なもの響きがある。また、そうい
う捉え方をする人が多いという前提

で、放送界や出版界で、ドタバタの
くだらない番組や「ありのままのあ
なたを知る」といったキワモノの心
理学的書物を生産している。こうし
た状況に惑わされてはいけない。

新入生の皆さんは、何度目かの自
分の人生の選択で大学に入学された。
その動機や経緯は様々であろうが、
これから四年間大学生活を送ること
だけは共通のことである。この
時、現在の自分があるがままに生き
ていこうとだけ考えている方は一人
もいないであろう。漠然としたもの
であつても、何らかの希望や計画は

必ず持っているものと信じる。

それを実現していく一つの手段が
読書である。既に受験生の頃から読
書の習慣をつけている人も多いと思
われる。私自身、高校生の時にモー
パッサンに夢中になり、図書館にあ
る全集を全て読んだ記憶がある。ま
た、後期には高橋和巳にとりつかれ
これもまたむさぼるようにその世界
に入っていた。短編小説が書けな
い彼の不器用さと思考の誠実さに大
いに影響を受けた。そのころの読書
メモは今でもさまざまな場面で思い
出されることがある。

大学に入学された皆さんは、これ
からは、小説やエッセイの読書とは
異なつた、収束的思考を要求される
読書態度が必要になる。

収束的思考とは、何らかの問題解
決を目指した、情報の探索・取捨選
択・処理・出力を行なうことである。
それぞれの過程で多様な方法がある

ので、同じ問題についての解決方法には、その人の個性が反映される。図書館における行動をモデルに、こうした思考法の実際の姿をみていこう。

まず、「問題」を吟味して、現在の自分の状況（ありのままの状況）と、問題が解決された時の状況（想定される状況）のギャップを知る事が第一である。

次には、そのギャップを埋めるための手段の選択となる。実際には大まかな見通しを持って図書館に入る。入館後書架へ接近し、関連のありそうな図書を探索する。多くの場合、眼前の書架を見直し、目的とする情報のあるような位置を模索する。

次に為すことは、これぞと思われる書物を書架から降ろすという作業である。そして本を開いてその情報のより綿密な吟味が始まる。ここで、目的とする情報が得られれば、その

メモを取ったり、図書の借り出しを行う。現在の状態と目標とする状態のギャップを埋めることのできない情報しか得られない場合は、再度図書の探索を繰り返す。

多くの場合、一度の入館で事足りることはまずない。従って、得た情報を何らかの形でメモしていくことが重要である。人間の記憶には大きな制約があるので、ノートのようなものに書きためていくことが望まれる。こうしてペンディングにされた情報が何らかのきっかけで相互に関連を持ち始めてくるのである。

図書館に入り書架に接近し、全体を見直し、目的とする本を取り上げ、開き、開いたページの情報を目で吟味しメモをとるといった、こうした一連の行動の連鎖で、収束的思考をモデル化して説明できる。ここでは、知識を構築していくことで自分自身の変容を自発的に行っているのであ

る。そこにはある種の「構え」が要求される。

これから皆さんが大学で経験する「問題」は、これまでのような、「正解」が一つあって、それに到達する手段（公式や法則）の記憶量や有効な利用方法を問う、いわゆる「課題」ではない。問題そのものの設定から始まる、困難な状況を引き受けるために大学にきたのである。その状況を引き受け、みごとに「解決」していけば、その過程で人間的に大きく成長する事はすべての大学人が保証するものである。

ありのままに生きようとすることも、その全く逆の、構え過ぎて生きようとすることも推奨できない。構え過ぎは空虚な学問を生み出すことがあるからだ。

『いやなら読むな。』

されど……』

野村 幸正

のむら ゆきまさ
文学部教員
認知心理学専攻

「いやなら本など読むな」と言い切る大学教員はまずいない。だが、私は敢えてそれをいう。「本を読め」といわれる大学生の戸惑いがありありと目に浮かぶからである。その戸惑いには理由がある。彼らは、一体何のために本を読まなければならぬのか、その理由の本当のところがいま一つ掴めていない。また、一体どんな本を、どのように読めばいいのか検討がつかないこともある。以下は独断と偏見に満ちた私の「読書案内」である。

まず、教員は自分の専門を盾にと

って読書をすすめる。しかし大学生にとつて「専門」は多様な大学生活のほんの一部分でしかない。大学が、社会が変貌したのである。彼らにとつて「読書」の占める位置は決して高くない。

大学生の質が低下したのでろうか。そのあたりをまことしやかに論じる教員もいるが、私は決してそうだとは思わない。彼らは多士済々であり、特殊な専門領域ならいざ知らず、その他では教員よりも遙かに物知りであることもある。当然である。近代社会では知識は一部の人の専有物で

はない。彼らが本を読まないのはその必要がないからである。彼らの知識構造に占める媒体としての読書の位置が低下しただけである。彼らは時代にあつた形で情報収集をしているのである。

だが、時代に迎合したその種の情報に満足し、しかも他者によつて作られた「枠」のなかに身を委ねて四年間を過ごすのは正直いつて寂しい。私の考えでは大学は「無用の用」であるべきだが、そうするためにもその種の「枠」を打破しなければならぬ。

その有効な手段の一つが読書である。言葉を通して展開される世界は映像などに比べて遙かにあいまいである。そのため具体的な形でわれわれに迫ってくるものではない。著者と読者の間には、読者が埋めなければならぬ隙間がある。それを埋めるのはあくまでも読者の感受性であ

る。それをいきなり獲得することはできない。読書を通して徐々に獲得してゆく以外手はない。そしてこの獲得を契機にして、新しい世界が開け、そこに自己を新たに見出しうるのである。「杵」を打破するにはこれ以外にない。

次に、どんな本を、どのように読むかである。男と女の出会い、そして結婚にもいろいろな形態があるように、どの本を読むかは、またどのように読むかに関しては、基本的には自分の好みで決定すればよい。その好みが一生涯続けば、それはそれでよい。普通はほとんど変わるから、最初は特に自由でよい。いまの気持ちに正直に読んでゆけばよい。そのうち人に意見を求めることもある。その気になったときの助言はすーっと入る。まさにチベットの箴言の「弟子の準備が整って師が現れる」である。

必要なことは図書館の、書店の書棚の前にぶらつと立つことである。一冊を手取ることである。どれを選ぶか、そして読むかどうかは「何となく好き」から入ればよい。しかも気に入ったところだけを読めばよい。「何となく」の背後には暗黙知がある。そこにはある意味で自己が表出している。女（男）を好きになる心境である。それに理屈は要らない。愛し方も、そして読み方もあくまでも自由である。好きになればさらに読んでゆくはずである。そのうち自分の求めているものにでくわすはずである。

最後に、私は年間うん十万円の本代を支払うが、それを全て読むわけではない。そのなかから気に入った本を捜し出すための投資である。年に一ないし二冊見つかればもうけものである。その本を何回も読む。著者に近いレベルにまで読みこなす。

文字が本から抜け出し、目に飛び込んでくるまで読み込む。しかもそれを自分の血とし、肉することで身体の一部にまで高める。身体が感じとったもののみを自分の知識にしたいと考えている。そしてそこから授業を展開し、時には「本」という形で自己を表現する。

これが私の読書のやり方である。誰にでも通用するわけではない。あくまでもいまの私の気に入ったやり方である。

履修云々にかかわらず私の「心理学」を受講して頂きたい。また拙著『知の体得——認知科学への提言』（福村出版）、「関係の認識——インドに心理学を求めて」（ナカニシヤ出版）を書棚から手にとって頂きたい。そして相性がよければ読んで頂きたい。

自己主張と独断

元木 久

もとき ひさし
経済学部教員
理論経済学専攻

私が家族とともに一年余り過したイギリス・ヨークでの出来事の一つである。ある程度ヨーク生活に慣れた頃のこと、近隣の村に住む女性から私の妻に、「この秋、文化交流を中とした世界婦人会イギリス支部が日本人を招待してヨークで大会を開催することになったので、イギリス側の通訳兼世話人として手伝って欲しい」というような話が持ち込まれ、常日頃大変親切にしてもらっているヨークの人々に少しでも役立ちたいと考えていた私達は、尻込みしながらも、それを引き受けた。どんな日

本人が訪問するかはまったく判らなかつたが、生花、折り紙や着物などを中心とした実演と講話とのことで、それぞれの用語をどのような英語で表現すれば、イギリス女性に理解されやすいかを近所の人々に教えてもらいながら準備して当日に備えた。当日の会場には数百人のイギリス女性が参加しており、私一人が男性、居づらい思いで会場の片隅で時間を待っていた。日本からの訪問客がきなので、先に紹介すること、別室に案内された。驚いたことに、十数人の日本人のうち、女性はわず

か三名であった。私は当然のように、全員が女性と予想していた。後日、ヨーク大学の政治学部で大正デモクラシーを中心に研究している私達の親友、クランプさんにこの話をする、と、彼ははいつも簡単に「日本ではごく当たり前のことではないですか。女性の会議でも、そのトップは男性が占めていて代表団として男性が訪問することは驚くに値しない」と言う。私は日本に対する自分の認識の甘さを痛感した。

* * *

オリンピックの開かれるバルセロナに目下建築中のサグラダ・ファミリアという教会があるが、それは今世紀最大の建築家といわれたガウディが基本設計し、一八七〇年に建築が始まった。すでに一三〇年以上経過している。完成までにまだ何年かかるか誰も知らない。ガウディは一九二六年に他界しているが、彼の

構想が受け継がれて僅かづつ完成に向かっている。その建物のどの部分をとつても芸術を感じさせないところはない。日本人の彫刻家が一人そこで奉仕しているという話を耳にした。芸術性は無視され、機能性だけが追求され、世界一の建築速度を誇る現代の日本の建築物をサグラダ・ファミリアと比較して、彼我の相違を考えることは意味があろう。

* * *

上海から紹興まで行ったときのことである。列車転覆事故が二日前に起こっていたが、ダイヤが回復しているとのことで、予定通り朝五時半ごろ上海駅に行った。ところが、「寧波行きはまだ来てない。来たから教える」と言うだけで、それ以外の情報は一切与えられず、一時間毎に問い合わせても「メイヨウ」との答えだけ。紹興まで五時間程かかる。ホテルは着いてから探さなければならぬ。

十一時になったので諦める決心をして荷物を持ち上げたとき、列車が来た、と服務員が伝えにきた。悩んだ末、雨のそぼ降る寒い夕方の紹興駅に下りた。同じ軟座車にいた品位ある一人の中国人がアドバイスのみならず、客車係に指示を与えてくれた。そのお蔭で、帰りの切符とホテルの見込みができた。紹興飯店では部屋がないとの一点張り、それ以外何も教えてくれない。上海駅の服務員と同じ態度で、気分が悪いことこの上なかった。ところが、若い別の受付嬢が近くのホテルへ案内してくれた。冷えた体を温めるべく、水道の栓をひねった。湯はまったく出ない。受付の責任者と交渉したが、話にならない。そこで、客室係の女性に話をする。魔法瓶を七、八本部屋に運んできてくれ、これで我慢してほしいという。まったく嬉しくなかった。責任者と雲泥の差

である。

現在の日本人とはどんなものだろうか。どのような日本人がつけられようとしているのであろうか。自らを他者と比較しながら位置づけるのも一つの方法である。以下の書物はそのための参考である。

* * *

オールコック『大君の都』岩波文庫
サトウ『一外交官の見た明治維新』

岩波文庫

ゴロヴニン『日本幽因記』岩波文庫
ボネ『不思議の国家ニッポン』角川
文庫
エモット『日はまた沈む』草思社

考えるな、見よ

若森章孝

わかもり ふみたか

経済学部教員

経済理論

レギュラシオ理論専攻

新入生のみなさん、入学おめでと
う。わたしが大学に入学したのは二
〇年以上前ですが、ある教師がわた
したち一回生に「君たちは二一世紀
に生きる世代だ。レーニンとケイン
ズを超えよ」という言葉を贈ってく
れました。近年の社会主義の解体や
アメリカ資本主義の衰退を見ながら
わたしはこのキザな教師のことをよ
く思い出します。

わたしは二一世紀の前半に人生の
「働き盛り」をむかえるみなさんに、
「考えるな、見よ」という言葉を贈
ります。というのは、価値観や制度

や生活様式のすべてが変容しつつあ
る今日、「見る」という行為を意識
的にやる必要がある、と痛感する
からです。本を読む時、その本が自
分の存在をゆさぶるような貴重なメ
ッセージを含んでいるのに、わたし
たちはしばしばそのようなメッセー
ジを見逃してしまいます。なぜでし
ょうか。読書の間、わたしたちが眼
の働きよりも頭の働きを重視してい
るからではないでしょうか。頭は古
い考え方（パラダイム）に従って働
いているので、わたしたちは、新し
い動きをつかまえる眼の能力を無意

識に抑圧してしまっているのです。
「眼からうるこが落ちる」なんて言
いますが、古い考え方は意識的に落
とすべきうろこです。現在は「自分
で見る」能力が曇らされている時代
ですので、見るということさえしつ
かりやっていけば、頭の方も自然に
考えるという働きをちゃんとやって
くると思います。ビデオ世代のみな
さんには、ビデオが「わたしは見る」
という能動的な原意をもっているの
を知っておいてほしいと思います。

世紀末の現在、二〇世紀のシステ
ムの基礎にあつた考え方がゆらいで
います。このゆらぎをビデオしてく
ださい。例えば、みなさんは、永遠
に存続すると思われた国家が解体す
るのを目撃しています。ソ連邦は解
体しましたし、ユーゴスラビアは解
体の危機にあります。他方では、E
C統合のように、新しい国家が誕生
しつつあります。ドイツ、フランス、

イギリスなどのEC諸国は、ヨーロッパ議会、共通の通貨と中央銀行、共通の統合市場と社会保障制度、共通の軍事・外交政査をもつヨーロッパ共同体の建設をめざしています。もしこのような新しい国家ができれば、二〇世紀における戦争と抑圧の大きな要因であったナショナリズム、国民国家、民族といった要素が消極的なものになり、人びとは自分の「存在証明」(アイデンティティ)を、国家との関係ではなく、「地域」や「地球環境」との関連のなかで追求するようになるかと期待されます。既成の考え方にとらわれずに見るといふことは、新しい自己の発見につながると思います。

わたしが最近おもしろいと思った本は、「わたしは見る」という観点から書かれた本です。例えば、勝保誠氏の『現代アフリカ入門』(岩波新書)は、「できる限りアフリカ人

の声、主張、願望に耳を傾け」ながら、この大陸に適用された市場万能主義も社会主義も南北格差の縮小に役立たなかったことを分かりやすく説明しています。また、リビエツ『勇気ある選択』やボワイエ『レギシュラシオン理論』(共に藤原書店)は、資本主義には予想以上に多様な発展がありうることを、しかもどのタイプの発展を選ぶかは市民の勇気にかかっていることを明らかにしています。さらに鶴見俊輔氏の『アメノウズメ伝』(平凡社)は、「笑いをさそい、相手の緊張を解く」アメノウズメという日本神話の人物——氏はアメノウズメらしい特徴として、「まず、美人でないということ。しかし、魅力がある」ことを含め、七つ列挙している——を、現代の女流作家、瀬戸内晴美や田辺聖子などの作品に読みこむことによって、「日本と外国、天と地のはざまに立

って、権力のめざす思想の固定をゆすぶる、ひとつの姿」(二四ページ)を描いています。異質な他者との出会いに際し、「対等性を求めて排他的ではない」アメノウズメの態度は、わたしたちにいちばん欠けているものだと思います。現代の日本社会でいちばん欠けている態度を『古事記』や『日本書紀』の中に、あるいは、現代作家の中に発見した鶴見俊輔氏の眼は、「わたしは見る」という意志的な眼だと思えます。

わたしはみなさんが「見る」という意志的な行為を、本の世界を超えて、講義や研究会、外国旅行や国際交流にまで拡大してくれることを期待しています。

辞書を常に座右に

永沼博道

ながぬま ひろみち
商学部教員
商業史専攻

近ごろ、私のゼミナールの学生を見ていて非常に気になることがある。それは、報告のために自分で作成したレジュメの漢字が読めないこと。なんら恥じず、報告の途中で読みを問う学生が毎年見られることである。それも一人ではない。いつも複数である。それらの学生は、テキストの文章の読み方さえ解らずに、その一部を抜き書きして皆の前に披露しているのだ。手持ちの漢和辞典をひもつけば簡単に済むことである。二、三の言葉の読み方と意味を調べるのに必要な数分が惜しいのであろうか。

それとも一冊の漢和辞典も所有してないのであろうか。まして、専門用語を事典類にあたって予め調べてくることを期待できる学生は少数にすぎない。解らないことがあれば、全て先生に聞けば良いとする態度が見える。その原因はどこにあるのだろうか。もうひと昔も前のことであつたらうか。一年生を対象とする英書講読を担当していた時のことである。開講して二ヵ月たった頃、一人の学生が私のところへ来て、次のように要求してきた。

「先生、テキストの単語帳を作って配ってくれませんか。いちいち辞書を引いていると、予習するのに時間ばかりかかって効率が悪いですよ。」私は驚くと同時に、その学生がクラスでも最も優秀で勤勉であつただけに、やや悲しい気持になつた。最小の努力で、さしあたり最大の効果をあげようとする受験勉強の弊害をまさに目にした感がした。

以来、英書講読を担当する度に、まず辞書に親しむことの意義を語り続けている。外国語を読む場合に限らず、日本語を読み書きする場合でも辞書を手元に置いておくべきである。私にしても、国語辞典の助け無しには葉書一枚書けないのである。

語彙を増すために辞書を読み耽つたと言われる北原白秋の真似はできないものの、辞書には、常に新しい発見がある。ある言葉に予想外の意味があることを発見したり、その言

言葉本来の意味を知って、言葉が体現している文化に触れることもある。

例えば、英語の STUDENT という言葉を取り上げてみよう。それが学生を意味することは誰でも知っている。しかし、STUDY ないし STUDENT の意味を少し詳しく見ていくと、STUDY の本来の意味は、何かに熱心に取り組むこと、絶えず努力することであり、したがって STUDENT の意味するところは、熱心である人、何かに熱中している人ということになる。STUDY は本来、強いられた学習を意味しているのではない。いかなれば、熱心でない人は STUDENT ではないことになる。関心を持った人は、辞書を使いラテン語まで遡って調べてみよう。それが STUDY で、そういったことをするのが STUDENT なのだ。

次に、諸君も愛用しているジーンズすなわち JEANS を調べてみよう。



そうすると、JEANS は北イタリアの港町ジェノヴァに由来することが判明する。すなわち、北イタリア各地で生産され、ジェノヴァを経由して合衆国に輸入された綿布には、出港地としてジェノヴァのフランス語表記である GENES と記載された荷札が付けられていた。この GENES

を英語読みすると JEANS ということになる。当初おそらくジェノヴァ経由で輸入された綿布を JEANS と呼び慣わしていたのが、同種の綿布一般を指す普通名詞化し、さらにその綿布を使って作られた作業用パンツを意味するようになったのである。アメリカ文化の典型としてシンボライズされた感のあるブルージーンズの意外なルーツを見る思いがする。

このように、辞書には常に新しい発見がある。目的の意味や文字を探しただけで満足するのはもったいない。言語に敬意を抱き、より多くの関心と興味を抱いてみよう。そこには知的好奇心を駆り立てる無限の沃野が広がっている。思春期のある時期、辞書のなかにある種の言葉を探した秘かな思いは誰しもあるう。それを思い出して、大いに辞書に親しもう。

商学部四年間で 読んだらよいと思う本

羽原敬二

はら けいじ
商学部教員
損害保険論専攻

新入生への読書案内としては、いろいろと方法論や読書経験を述べるよりも、ずばり読むべきであるといえる書物の名を列挙するほうが、より効果的であり、実際的でもあると考える。そこで、小生が商学部の教員である関係から、特に商学部で学ぶ諸君に対して、卒業後も役に立ち、四年間で読んでおくことが望ましい書物を、紙幅の許す限り、以下に書き出すことにした。

どうかこれから四年間で、自分の興味や学習上の必要性などもあるうとは思いますが、とにかく次の書物をも

し書店や図書館で見つけたら、手にとつて中身に目を通し一読して見ることゝ勧める。なお、できる限り文庫判で入手できるものは、文庫本を明示した。(順序不同)

- ・ 高杉良平著『小説日本興業銀行 第一部―第五部』(講談社文庫)
- ・ 城山三郎著『鼠』(文春文庫)
- ・ 室伏哲郎著『企業犯罪』(講談社文庫)
- ・ 佐高信著『実と虚のドラマ』(日本経済新聞社)
- ・ 佐高信著『経済小説でしか書けなかつた話』(東洋経済新報社)
- ・ 佐高信著『経済小説の読み方』(現代教養文庫)
- ・ 佐高信著『会社を読む』(徳間書店)
- ・ ヤン・カールソン著、堤猶二訳『真実の瞬間』(ダイヤモンド社)
- ・ 日経ビジネス編『良い会社』
- ・ 日経ビジネス編『会社の寿命』
- ・ 日経ビジネス編『続会社の寿命』
- ・ 日経ビジネス編『続々会社の寿命』(以上、新潮文庫)
- ・ 日経ビジネス編『環境に良い会社』(日本経済新聞社)
- ・ 日本経済新聞社編『ゼミナール日本経済入門』
- ・ 渋谷道夫・飯田信夫著『ビジネスゼミナール英文決算書入門』
- ・ 辻敢・脇田良一著『ビジネスステキスト決算書入門』
- ・ 金児昭著『会社社理入門』
- ・ 伊丹敬之・加護野忠男著『経営学入門』
- ・ 日本経済新聞社編『現代企業入門』

- ・(以上、日本経済新聞社)
- ・日本経済新聞社編『ベーシック経営入門』(日経文庫)
- ・小島義輝著『英文会計入門』(日経文庫)
- ・岩田龍子著『日本の経営組織』(講談社現代新書)
- ・伊丹敬之著『新・経営戦略の論理』(日本経済新聞社)
- ・日本経済新聞社編『現代経営学ガイド』、『続現代経営学ガイド』(日本経済新聞社)
- ・P・H・ドラッカー著、野田一夫監修、現代経営研究会訳『現代の経営』(ダイヤモンド社)
- ・北原貞輔著『経営進化論』(有斐閣)
- ・戸部良一・他著『失敗の本質』(中公文庫)
- ・生方幸夫著『入門の経営S I Sのしくみ』(日本実業出版社)
- ・トム・ピーターズ著、平野勇夫訳、野中郁次郎解説『経営革命 上・下』(TBSブリタニカ)
- ・H・ミンツバーク著、北野敏信訳『人間感覚のマネジメント』(ダイヤモンド社)
- ・H・I・アンゾフ著、中村元一・黒田哲彦訳『最新・戦略経営』(産能大学出版社)
- ・土屋守章著『企業と戦略』(リクルート出版)
- ・住友商事文書法務部『アメリカビジネス法務』(有斐閣ビジネス)
- ・山本満雄著『リーガルマインドへの挑戦パートI・II』(有斐閣選書)
- ・渡部喬一著『会社役員法の常識』(有斐閣ビジネス)
- ・長谷川俊明著『法律英語シリーズ1~5』(東京布井出版)
- ・長谷川俊明著『ローダス法律英語事典』(東京布井出版)
- ・早川武夫著『会議法の常識』(商事法務研究会)
- ・小島直記著『まかり通る上・下』(新潮文庫)
- ・童門冬二著『上杉鷹山上・下』(学陽書房)
- ・阿川弘之著『米内光政』(新潮文庫)
- ・阿川弘之著『井上成美』(新潮社)
- ・岩淵悦太郎編著『悪文』(日本評論社)
- ・本多勝一著『日本語の作文技術』(朝日新聞社)
- ・小堺昭三著『企業決戦 三井三菱上・下』(角川書店)
- ・小島直記著『東京海上ロンドン支店上・下』(新潮社)
- ・友田二郎著『国際儀礼とエチケツト』(学生社)
- ・マーク・ピーターセン著『日本人の英語』、『続日本人の英語』(岩波新書)
- ・白崎秀雄著『耳庵松永安左エ門上・下』(新潮社)

〈おたく論〉のすすめ

岩見和彦

いわみ かずひこ
社会学部教員
社会学専攻

私は、本を読むのがそれほど得意ではない。あまり速く読めないし、全体を要約するような読後感をうまく引き出すことも、けっして上手な方ではないからだ。でも、その大切さだけは、十二分に知っている。ものを考えることの訓練としては、やはり活字メディアが有効だし、ひとかたまりになった、つまり編集されたメッセージが定着されていて何度もそれを味わうことができるようになってきているのも、本というメディアのもつ利点である……。こんなワケシリ顔の言いほどほどにして、

活字メディアにもそこそこ親しんでもらいたいなあ、といったお祝いをこめて、ちよつとした入学のお祝いを申し上げることにしよう。

「おたく」を知らずして90年代は語れない！——これは、大学生の大好きなあの別冊宝島という雑誌（最近はややパワー不足気味ではあるが）の、一〇四号『おたくの本』の編集コンセプトである。ついではから「おたく」は、80年代が生んだ、高度消費社会を読み解くキーワードである、がそのキャッチコピーである。それほど大事なことからしいの

で（実は、いま重要なテーマの一つだと私は考えているのだが）、新入生のあなた（おたく）も、関大での勉強はこの「おたく」を知ることからはじめなければならぬ。もしも、あなたが「おたく」と呼ばれることに嫌悪感を抱いたり、その該当者を「差別」しそうになったりするのなら、それがまつたくの「無知」からきていることを、もしも、あなたが自分こそ「おたく」の典型、と自己定義したがつているのならその安易さを、反省するためにも、絶対にこの勉強はあらゆる「パンキョウ」（一般教養科目）に先立ってなされなければならない。そこで、おススメの「読書のすすめ」を処方してみると……。

別冊宝島の前述の本（一〇四号）は断然いい。必読書である。ここに載っているいろんなルポやエッセイや評論をていねいに読むこと。そし

てあなたが、社会や思想といったジャンルの響きに心地よい反応を示すようだったら、最後に登場する書き手、浅羽通明の単行本、『天使の王国——「おたく」の倫理のために』（JICC出版）へと読み進んでみなさい。少し雑なところもあるけど、まあまあスケールの大きい、しかも自分の人生の時代の意味をあまりだしてくれる、いわゆる良質の「社会科学」的な評論と出会うことができはらずだ。

また、あなたが、自分という人間の「おたく性」に気づき、心理学的興味をつのらせたり、それを通り越して深刻に悩みだすようなら、中島梓『コミュニケーション不全症候群』（筑摩書房）を是非熟読しなさい。著書自らがひと通り体験したという「症候群」についての確かな記述、そして岸田秀学派(?)の「精神分析学」をベースにした簡明な解説、栗

本薫名で書いたものを含めた「少女もの」マンガ・小説作品の大胆な評論、そしてそれらをまとめあげている現代人間論は——小生にとつては少女マンガの読みづらさに通じるところもあつたが——、読みごたえ十分。へたな心理学入門、マンガ評論、フェミニズム本に時間を費やし、学問的関心や興味をしばめてしまふ愚をおかすことはやめ、この八方破れの鋭い言説に、ちようど滝に打たれて修行するような気分で、身体の芯まで感応することを、是非ともおすすめする。

そしてできることなら、浅羽氏のものや先に読んだ人は中島氏のものに、逆の場合も同じように読み進んでほしい。そうすればきっと、片方だけの場合より、いっそう現代の人間⇨社会現象の広がりや深さを感取することができるだろう。

私の考えでは、いま一番大切な

は、自閉し他者の「生」を遠ざけることでしか病んだ現代に適応できない人間が、どのようにして他者たちと共生していく道を探せるか、言い換えれば、「他者の異文化性」とどうつきあうか、という問いなのだと思ふ。それに答えるためにも、まず、病むことを余儀なくされた現代人が、自らの「病識」をちゃんともつこと、そして、いま自分はその「生」を生きてはいないが、可能性としては自分も生き得る「生」を、別の自分としての他者が生きているのだ、といった想像力と感受性をみがくことが、特に若い人たちに期待されている。

この「潜在・未在の自己」としての他者、その「生」への共感こそが、私の〈おたく論〉のすすめの眼目なのである。

遊びのススメ

山本 準

やまもと じゅん
社会学部教員

新人生のみなさん、入学おめでと
う。陰惨な受験戦争から開放され、
ようやく一息つくことができたこと
でしょう。しかし人生の競争はこれ
で終わりではないのです。四回生に
なつての就職活動、あるいは大学院
への進学、さらには就職後の出世競
争など、好む好まざるに関わらず一
生競争社会の中で生きていかなけれ
ばならないのです。

こんな人生の中の休憩時期が大学
生活であるといえば、日本の大学生
は勉強しない、大学はレジャーラン
ドではないかとお怒りになつてい

先生方からお叱りを受けるかも知れ
ません。しかし人生の中には無目的
に遊ぶ時間がなくてはならないよう
にも思えるのです。小・中・高校と
塾にも通わず放課後は毎日おもいっ
きり遊んだといえる人がどれだけい
るでしょうか。

大学へ入つてしまえば、塾にいく
必要もない。毎日あくせく勉強に追
われることもない。年度末の定期試
験さえ要領よくこなせば、人生にこ
れほど気楽な時期はないように思え
るのです。だからこの大学時代に遊
ばない手はない。

スキーよし、テニスよし、合コン
よし、旅行もまたよし。モラトリア
ムの時期はモラトリアムらしく思い
きりモラトリアムして下さい。

ただし遊び呆けてはいけません。
遊び方にも若干のマナーやテクニッ
クがあるのです。出席欲しさに講義
に出て友人と私語にふけつたり、試
験の時にカンニングしたり、単位を
取りそこねたり、挙げ句の果てに留
年したり、単位欲しさに洋酒片手に
研究室めぐりをするなどは遊び道
下をなす行為なのです。

外道に陥らないためには、やはり
必要なときにはしっかりと勉強する
ことも必要でしょう。このポイント
を押えてこそ十分に遊ぶことができ
るのです。

さて、何をして遊ぶのか。スキー
か、テニスカ、ゴルフか、コンパか。
何でも良い、その時それがしたけれ
ば。ただ身体を動かして遊ぶことだ

けでなく、頭を働かせて遊ぶこともできるのを忘れないようにして下さい。頭を使う遊びといえば、囲碁・将棋・ゲームなどある。読書も頭を使う遊びである。

本読むことは遊びではないと思う人がいるかもしれない。そのような人は受験参考書や教科書、課題として能えれた感想文のための読書などに毒されているのです。

読みたい本を時間をかけて読む。単位取得に役立つわけでもない。アルバイトのように金になるわけでもない。ましてや腹の足しにもならない。このような無益な読書こそ本当の遊びではないでしょうか。

かつて「若者よ、書を捨てて街に出よう」というコピーがありました。ある意味ではこの通りでしょう。人生を知るために、実用的知識を得るために本を読むのならば、本など読まず街に出て働き、そして遊んだ方

がよほどその目的を果たせるのではないかと思えます。

本を読むことで人生を学ぶことはできません。また生活の糧を得られるわけでもありません。しかしそれでも本を読むことで得るものがあるのです。それは感動です。この感動を得ることこそ遊びの真髄ではないでしょうか。

最近はその値段も高くて、試しに買って読んでみるということが難しくなっています。よほど経済的余裕のある人は別ですが、私などは貧乏な学生生活をおくっていたので、本を買うのに四苦八苦でした。しかし、なにも本は買って読まなければならぬことにはないのです。実用のための本ならば個人で所有する必要もありません。遊びとして読む本ならば買う必要もないでしょう。

幸いにして関西大学には数百万冊を蔵する図書館があります。まさに

これは知的遊びの宝庫ともいえるのではないのでしょうか。

わずか四年とはいえ、大学生活は何物にも代えがたい時間です。体を使った遊びとともに、頭を使って遊ぶことも忘れないようにしてください。新入生のみなさんが遊びの外道に落ちないように祈っています。

旅の中の旅

吉田栄司

よしだ えいじ
法学部教員
憲法・国法学専攻

昨一九九一年の正月休みに、私は留学先のドイツから地中海のクレタ島に飛んだのち、ふと思いついてイスタンブールまで足をのびした。湾岸情勢が緊迫していたために、NATO加盟国トルコに出かけることに若干の危惧を抱いたが、安保理決議が設定していたイラクのクウェート撤退期限までまだ日にちがあるからと思いつき、イスラム世界をこの目で見るといふ永年の夢を叶えるべく出かけることにしたのである。

ブルー・モスクやグラン・バザール、アヤ・ソフィアやトプカピ宮殿

もさることながら、郊外のトルコ軍事博物館で目にし耳にしたかつてのオスマントルコ軍楽隊の復元演奏には、何ともいいようのないインパクトを受け、身じろぎもせずに聴き入ることとなった。それは、「聖なる闘い」に向けてあまたの兵の士気を鼓舞するに相応しい、いかにもイスラム的な勇壮な調べではあったが、しばらく耳を傾けていると、われわれ日本人の音感になじむアジア的な哀愁を帯びた響きが、文字通りその通奏低音として流れていることに気付いて、何とも不思議な感覚に包ま

れていった。さらに、旅の道連れにと持って来ていた文庫本、丸谷才一の「裏声で歌へ君が代」を機内で読み終えていたこともあって、国家とは、軍隊を駆使し続けてきた国家とは何だ、民族とは、そしてまた宗教とは一体何なんだ、との思いに深く引きずり込まれてしまったのである。強大な権力、おびただしい財宝、そして繰り返された戦争。その時々スルタンを取り巻く支配者たちがいて、歴戦のつわ者からいたい気な少年にまでいたる兵士たちがいて、男や女、年寄りや子供、数えきれない民衆がいた。それら幾百千万の個々人の感情の渦を飲み込んで流れて行った戦争の歴史。正義を行なうために？ 否、国家の存在には目的などないのかもしれない。ただ単にこれまでいろいろとあっても今もあるというだけのものなのかもしれない。いや、そんな諦観をもちたくはない。

仕方がないそれは歴史というものだと、私はやはりいたくない。たとえ、いずれは国家を消滅させることができるにせよ、やはりあるべき国家像を描き、それを尺度として既存のものを批判しながらその発展方向を模索する、それが私たちの課題であるはずだ。しかし、かつてのオスマントルコがどういう国家であるべきだったかなどということをはたして論ずることができのさだろうか。もしできないのだとすれば、刻一刻と過去となる現在を論じて、将来を展望することもまた不可能だといえはしないだろうか。……わからない。それにしても、この勇壮かつ荘厳な笛や太鼓の音を聴きながら、あるいは誇らしくあるいは諦めきれないままに突撃し、どれだけの兵士が血を流し死んでいったことか、と壮大な戦争絵巻に個々の兵たちの思いを絡ませながら、空間的な広がりと時

間的な流れ、つまりは人類史・世界史というものに思いを致し、トルコ語で山々の国を意味するとされるバルカンの諸民族やペルシャ湾岸のイスラム諸国、さらに遠い中国や日本にまで思いを馳せているうちに、ふと気が付くと本人に断りもなく私の目は勝手に風邪を引いていたのである。唯野教授・筒井康隆ならば、兵士たちではなく、九〇年代においては笛や太鼓や刀に感情移入すべきなのだということかもしれない、そんなことを思った記憶もある。

このささやかな思い出話は、旅と読書のいわば相乗作用を示す一つのエピソード、とでもいえようか。見知らぬ土地への旅の中で目にし耳にしたものが、読書という精神的な旅を伴っていたがために、時として思わぬ重みを持つて心に刻まれることがあるということである。もちろん、旅は旅として楽しむべきであって、

車中や宿で小説を読むなどもつたいない旅の仕方だという反論もあろうし、私自身あぶはち取らずだったかなと思つたこともある。ただ、地理的にせよ精神的にせよ、広げられた空間の中での体験をとりあえず旅ととらえ、体験にまさる教養はないとみたとき、学生時代こそ人生のうちで最も自由に旅のできる時期だということ、学生自身に忘れてほしくないなど、そう思っている。学生時代は、ながら族でもいい、感覚を大事にその趣くままに、時には馬力をもつて読むことのできる時期であり、同時に、長期の休暇を利用して、あるいは思いついた時にいつでも、車や汽車に飛び乗ることのできる時期である。二〇歳前後のこの時期に、自分を大きくするのに貪欲でないのは、それこそつたない人生という時間の旅の仕方ではないかと、そんな気がしている。

マンガ、または マルクス・フロイト 若田 恭二

わかた きょうじ
法学部教員
政治心理学専攻

今は映像の時代だと言われる。テレビが普及した頃から、人々の映像メディアへの依存度がどんどん高まって、最近ではほとんどの人がたいの情報をテレビを中心とする映像メディアから得ているという状態になってしまったようだ。たしかに情報の授受の容易さ（あるいは安易さ）という点で、人々がこのメディアに流れてゆくのはやむをえないことかもしれない。

大学生をはじめとする若者は、みんなそうした映像メディア中心時代に育って、それに馴らされてしまっ

ている。それは人と人をつなぐ「コミュニケーション」というものに対する姿勢の問題であるとともに、そうした「コミュニケーション」によってはぐくまれる思考方法や、意識の持ち方の問題でもある。つまり、映像メディアにどっぷりつかり、映像メディアに頼りきり、映像メディアに慣れきった人間は、それ以外のメディア、とくに活字メディアによる「コミュニケーション」に慣れた人間とは、その思考方法や意識の持ち方において、ちよつと違ってしまふということなのだ。はつきり言っ

て、映像メディアへの極度の依存は、人間の思考や意識の退化をまねく、ということを私は言いたい。

昔、すなわちテレビ時代以前には、マンガは小学生の読み物だった。しかし映像メディア中心の時代が到来して以来、マンガは大学生の読み物でもあるようになった。電車の中でマンガを読みふける大学生の姿が何らめずらしくない情景となつてもうひさしい。しかし私はやっぱり言いたい。マンガを読みふける大学生の姿は「カッコウ悪い」と。マンガを読みふける姿は、彼（または彼女）が、活字メディアによる「コミュニケーション」が要求する思考や意識のレベル（これは決してそれほど高度なものとは限らないが……）に達していないのではないかと疑わせるからだ。

文字、すなわち書き記されたコトバ、というシンボルをもちいて行な

われるコミュニケーションは、それを行なう人々に、類型化、概念化、象徴化、洞察力や空想力といったものを要求せずにはおかない。つまり文字を読み、本を読む人はこのような思考の力を働かせずにはすまないし、文字を読んでいるうちにそうした思考能力はしだいに培われてゆく。映像メディアだけにたよって、活字メディアから遠ざかった人は、確実にこうした人間にとつての重要な思考の力を退化させ、そのうちに失ってしまうだろう。

われわれが世界を理解するために、たんに世界のあちこちから入ってくる情報を受け取るだけでは充分ではない。受け取った情報を頭の中で整理し、分類し、秩序だて、体系的、論理的に説明しなければならぬ。そうした整理やシステムティックな説明をするためには、さきのような説明をするためには、概念化、象徴化、

洞察力、空想力などといった思考の力が必要不可欠となってくる。テレビやマンガからいくらたくさん情報を得たって、世界を理解する力は得られないということが、わかってもらえただろうか。

受験戦争を終えて大学に入ってくる皆さんに、「ちゃんとした書物」をたくさん読んでもらうための「読書案内」としては、まえおきはかりが長くなってしまうような気もするが、最後に、大学生として世界を理解するための力を得るにはどんな書物があるだろうか、私の考えを少しのべさせてもらいたい。

大学に入ってくる皆さんは、受験勉強のあのだちらかという不毛な知識のつめこみにはあきあきして、はやくさよならしたいと思っっているにちがいない。そして真に世界を理解するための力と知識を与えてくれるような書物にめぐりあいたいと、

心のどこかで願っているにちがいない。

私のアドバイスは、そのためにはやはりひろくたくさん書物に目を通すことだ、ということになる。私の専門分野である社会科学で言えば、新聞、雑誌類の時事解説から、現代社会の諸状況を描いたノンフィクションもの、社会評論的書物、あるいは社会科学の古典とされるような書物、そして大学の専門科目で参考文献とされるような各分野の専門書に至るまで、まったくさまざまな読み物がたくさんある。そのなかから自分が興味を覚えるものはどんどん読んでもらえばよいと思う。

しかしその中でも、この混沌として見える世界を理解したいという意欲を持った人にはぜひ目を通して置いてほしいと思うのは、やはり社会科学の基本的文献とされているようなものである。カール・マルクス、

シグムント・フロイト、マックス・ウェーバーなどの書いたもの、あるいはこうした人々の思想について概説したものを読みかつ考えることによつて、われわれは世界について考え、また理解するための基礎的な力をやしなうことができ、ベーシックな枠組みを得ることができるだろう。

現代の状況について書かれた評論やノンフィクションをいくらたくさん読んでも、得られないものがそこにあると私は思う。いずれにしても、電車のなかでマンガを読んでいるより、フロイトかレヴィ・ストロースの書物をかかえているほうがカッコいい。

「どこでもドア」を開く 楽しみ

馬場 昌子

ばば まさこ
工学部教員
住居計画学、
建築計画学専攻

小2の娘が読んでいる「どらえもんのおしぎ探検」の中に「どこでもドア」がでてくる。このドアをくぐると、瞬時にいろんな場所、時代にワープできるのである。おもしろそうに読んでいる娘をみていて、我が

関大にも素敵な「どこでもドア」があることを自慢したくなってきた。そう、図書館であり書籍です。表紙を開けば、その本の世界にすぐに入ることができる。

以前、仕事で、明治時代に日本を



訪れた外国人の紀行文などを数冊読んだことがある。もっぱら日本家屋に対する記述、特に台所空間の使われ方・諸設備・道具の観察を追ったのだが、中には、旅行記としておもしろくて、つい読み耽ってしまい困ったものもあった。

長い鎖国の時代から開国。政府に招へいされた御雇外国人ばかりでなく、世界各地から旅行者が訪れた。彼らの日本滞在記や旅行記などに当時の日本の様子が克明に描写されているものも少なくない。疑うなら、図書館にいつて実際にあなたの好きな「ドア」を開いてみるとよい。

例えば、エドワード・S・モースといえ、大森貝塚発見という受験わざがすぐに飛び出すであろうが、彼の著書の中に何冊も明治の日本について記したものがあつたことを発見するだろう。今からほんの百年ほど前のわが国の様子に、外国人が経験

し驚いたと同じような気持ちになること請合である。

ここに紹介するイザベラ・バードの「日本奥地紀行」(東洋文庫240平凡社 一、九〇〇円)もそんな本の一冊である。この本によつて、私は、明治時代にワープし、白人女性に変身して、東北・北海道を一人旅したのである。

イザベラは、当時47歳、イギリス生まれで、明治10年6月から9月にかけて、通訳兼従者の日本人一人を雇つて旅行をしたのである。百年も前に、この歳で、白人女性が、未知の土地、それも日本の中でも後進地域である東北・北海道の農村地域を、しかも一人で旅をしたと思うだけで、私などはワクワクしてしまう。

イザベラは旅そのものが目的である。訪問地の様子を妹や友人に手紙を書くというかたちで紀行文は進む。どのような装備・姿で旅行したの

かは、読んでのお楽しみ。

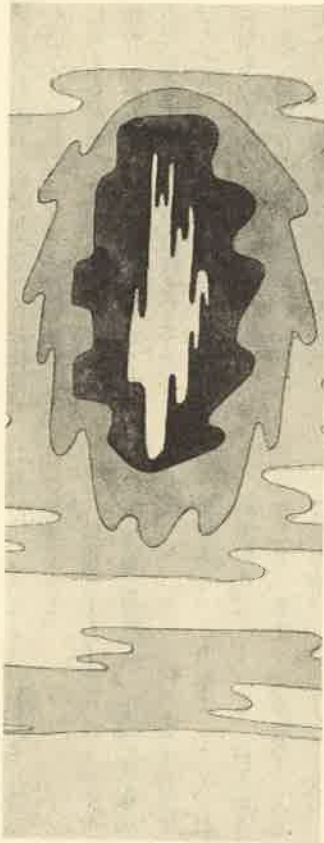
当時外国人は、国内を自由に旅行できなかった。だから、訪問地の多くで、白人女性を初めてみるという沈黙の群衆に、昼夜構わずじつとみつけられる。想像するだけでむずむずしてくる。人々は親切で、途中危害を加えられることもなく、無事に旅行は終わる。

はなしの大半は、悪路・しつつけの悪い馬・悪天候と悪戦苦闘する旅行のようすと、各地で見聞した美しい自然や貧しい農村のようすである。

電気、水道、ガスなどといったものは、ほとんど普及していない。日本人は、入浴好きで毎日お風呂に入らないと気が済まないなどということは、この本を読むかぎり、あてはまらない。皮膚病が蔓延し、非衛生な環境で人々は暮している。日頃なにげなく日本人固有の生活習慣や国民性として語られていることも、例

えば百年前まで遡ると、そうでないということ、この本に登場する日本人の生活ぶりがまるで現在と違うということを知ることができる。

近頃は、朝シャンやシャワー浴まで、特に若者の間ではやっているらしい。生活様式などというのは、短い期間に急激に変わってしまうものなのかもしれないなどと、ついつい住居計画という自分の専門にからめて、とりとめの無いことまで考えでしまった。読書が都合良いことは、テレビや映画のようにビジュア



ルで送り手の決めた時間の流れに左右れさるのではなくて、活字の奥にあるものに想像力を巡らせ、自分の都合で読み進んで行けることである。一行に一時間費やしたって構わない。これからの大学での勉強の楽しみの中に、読書による追体験を加えて頂きたい。

特に、建築設計を志したものに必要とされる能力の一つに、先の「想像力を巡らせる」ということがある。全く無の状態から一つの空間を創造するのだから、完成した空間に立つ

た人が、どう感じ、どう行動するかを、設計段階で十分把握する必要がある。そして、一旦建ったからには、一定の時の流れに耐えられるものでなければならぬ。人をどれだけ洞察でき、人と物・空間の絡みをどれだけ読めるのかという大いなる想像力が要求される。その為にも、想像力を巡らせながらの読書を多に楽しんで頂きたいのである。

「どこでもドア」を開くのはあなただです。

著者・台所のはなし

(鹿島出版、共著、一九八六年)

・老人とすまい

(中央法規出版、共著、一九

八八年)

・新版マンション管理を問う

(都市文化社、共著、一九八

九年)

*本文のみ昨年ものを転載いたしました。

投

稿

現代思想の快楽

そのⅣ

最終回 “読書の快楽のすすめ”

〈短評編でわかりやすく〉

松原 恵 一

最終回である。今回は「現代思想の快楽」と言うよりは「読書の快楽」として時には非論理的な思考方法で記すことにしたい。もしかすると、これを機会にあなたは「読書の快楽」の虜になってしまうかも知れないので、しっかりと批判精神をもって、この稚拙な文章を喝破してください。ちなみに、ここに選んだ幾つかの著者は私の趣味の領域のものであって、暇をもてあます「読書の快楽」という優雅な戯れ以外のなものでもない。

* * *

Roland Barthes

ロラン・バルト

『零度のエクリチュール』

ここでは、エクリチュール、言語体、そして文体とは厳密に峻別される。そしてエクリチュールは言語体と文体との間に位置することになる。

言語体、つまり古典主義的芸術とは透明体、沈澱物の残らない流れであり、厚みも責任もない。文体とは秘密裡で暗示的な効果をもつコトバである。そしてエクリチュールとは反伝達で人を威嚇するものである。つまるところ「メリメとロートレアモン、マラルメとセリーヌ、

ジッドとクノー、クロードルとカミュはそれぞれほとんど同時代人で、同じ歴史的状态でわれわれの言語体を語ったし、また語っているが、使用しているエクリチュールは大変ちがう」となる訳だが、よく理解できない。

また、この著書は記号論への導入書として、ソシユールと共に挙げられているが、むしろもつと文芸書であると云われるべきである。

『恋愛のデイスクール・曲章』

この著書をもって、社会学的にデイスクール論を展開させてみようとするなら、それは大いにナンセンスである。この著書は「愛の物語」を模倣し、文学の情性を手玉にとった文芸書である。つまり、語られた「恋愛小説」である。

『テクストの快楽』

「コトバに快楽を感じる」とはまさにこの著書のことである。個人的なことだが、私は『テクストの快楽』から、どれほど引用を試みたことか。少なくともフランス文学の研究をこれから志す者には必読の名著である。しかし、小説をあまり読まない人、買うだけ無駄。

* * *



Maurice Blanchot

モーリス・ブランシヨ

『文学空間』

マラルメは、わたしが花と言ったとすると、その声につづいて何の輪郭もない。観念そのものである《花》が現実の花の不在として立ちあがる、と言った。ところがブランシヨは言語のこのプロセスのうちに不可避的な死を見るのである。花という一語を発すれば、確かにそれは《花というもの》を喚起する。けれどもそれはいま眼



前で咲き誇っている一輪の花の輝きを抹殺し、音声という別の物質に置き換えることを代償として得られるものであり、《生ける花》は不在であるばかりか《死せる花》と化するものである。したがって、語るとは「観念による否定」の行為であり、ある種の「殺人行為」である。つまり詩人は限りなく殺戮を行うのである。役に立たないものとしての文学が、人間にとって何を意味するのか、という現代文学の本質的な問いを、私はこの『文学空間』より感じた。

* * *

Michael Foucault
ミッシェル・フーコ

『監獄の誕生』

国家の実践権力によるディスワール・言説を通じて、私達の精神構造が組織化される。つまり私達は、三つの排除の構造を植えつけられることになる。一つは性的な禁止やタブー、二つめは分割による正気／狂気、理性／非理性の二分法、三つめは真偽に基づく排除。当然のことながら、これらの権力は政治的に実践される。

フーコの批判はこの西欧の外部に対する理性主義的や合理主義の根底を振さぶりだす。この手の試みは、レーニンの『国家と革命』を初めに、イバン・イリイチの著書にまで幅広く浸透している。ちなみに「監獄」とは「学校」「病院」「刑務所」のことである。

* * *

Philippe Sollers

フィリップ・ソレルス

ヌーヴォー・ロマンの作家達の特徴、(i)言語的難解さ (ii)小説の中の時間の多層化 (iii)言語そのものへの反省的操作 (iv)作中人物の非人格化・非人称化。

ソレルスの著書は世界の文学（集英社）からの『公園』『挑戦』『ブッサンを読む』『ドラマ』（新潮社）、『遊び人の肖像』（朝日出版社）、そしてこの『例外の理論』（せりか書房）が翻訳されていて読むことができる。私としては評判のガリマールから出版された『Femme』訳出して頂きたいものだ。

* * *

Jean Baudrillard

ジャン・ボードリヤール

『消費社会の神話と構造』

消費概念の大きな変革をなしたのはジョルジュ・バタイユの『呪われた部分』によってであったが、この著書もその系譜上で読むと面白い。消費とはやはり、大いなるパワーの源泉であったのだ。スノビニズムの理論やエントロピーの法則、そして経済学での商品理論もこの消費概念を踏まえてはどうだろうか。ターナーの『象徴と社会』との併読をすすめる。

* * *

Ronald David Laing

R・D・レイン

『家族の政治学』

もしあなたが、フロイトやユングを読み終えていたのであればレインの著書をすすめる。実証科学にうんざりのかた、どうぞ一読を。

* * *





Louis Arthusser

ルイ・アルチュセール

『甦えるマルクス』

国家のイデオロギー装置概念の提案については、フーコ系譜で読んだ。国家とは国家権と国家装置との統一であるのだ。私はレーニン主義の復活を目指している訳ではないのであしからず。

* * *

Jacques Attali

ジャック・アタリ

『カニバリズムの秩序』

フランス社会党の経済分野における理論的指導者であり、ミッテラン大統領の懐刀といわれている。また欧州復興開発銀行（EBRD）の総裁でもあり、その活動領域は非常に広い。

この著書は、肉食の風習「カニバリズム」を鍵語に、歴史の諸相・現代社会の構造を解明する名著であろう。そして、つまるところ「生とは何か、死とは何か」を問いつけることになる。彼の著書の翻訳は、その他では、『音楽／貨幣／雑音』や『情報とエネルギーの人間科学』

がある。

* * *

今村仁司

『労働のオントロギー』

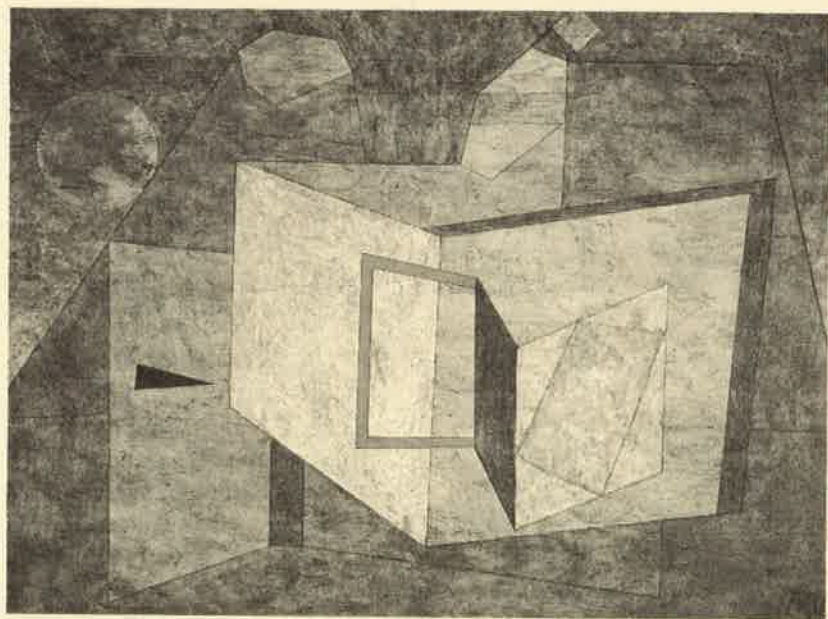
以前、この現代思想の快楽で今村仁司の『仕事』について記したことがあるが、『現代思想の快楽Ⅰ』の時に構造的要素を強調し過ぎたのは私の無知のためである。

それはさておき、この著書『労働のオントロギー』は浅田彰も言うように、「労働観の根底的な変革をめざす書物」であるのだ。

かつて労働事象は、その物質的な生産過程のみに主眼が置かれ、非対象化活動としての労働は第二義的であった。そのため生産の観念にのみ吸収されてしまった労働の本性を回復、認識、実践の総体を支える広い射程へ解放し、イリイチの言うところの『シャドウワーク』がそのキーワードになる。

現代社会の労働問題について考えている人は今村仁司の著者を読むと、未来の途が見えてくるのでは？

* * *



鷺田清一

『モードの迷宮』

一見、表層的なモード論を、その中核の身体論まで掘り下げた面白い著者である。その文章は軽妙で、『マリ・クレール』に連載されていただけのものだと思う。

市川浩の経由でこの著書を読んだが、この著書のほうが人間の存在について深く洞察しているのではなからうか。ちなみにこの著書は関西大学文学部哲学科の先生である。

* * *

以上、私が感銘を受けた著書を列挙した。

読書の快樂は、異性との恋愛による快樂にも劣らぬ悦樂をあなたに与えるであろう。人生は一行のボードレールにも如かないとは言わないが、死の快樂と同じように、著者との対話を楽しみ、時には撲殺しながら、余裕のある読書をすすめる。一行の哲学と一行の詩を、あなたの鎮靜歌として頂きたい。

(おわり)

(まつばら けいじ・社会学部卒業生)

投

稿

鏡花の『夜行巡査』『外科室』あたり

平野達也

最近映画化されたりもし、新たに脚光を浴びる泉鏡花
(一八七三—一九三九)。

その創作期間は約五〇年にも及び、珠玉の逸品あまた
あれども、ここでは、鏡花その名を世に出さしめた出世
作ともいうべき『夜行巡査』と『外科室』との二作品を
取り上げてみたい。

文芸時評の事

鏡花が最初に文芸時評に取り上げられたのは、『夜行
巡査』(明治二八年四月「文芸倶楽部」——警官が自
分の恋路を邪魔する老人を職務に対する責任観念遂行の

為に自分は泳ぎを知らないにも拘らず老人を救おうとし
溺死する——)についてのものではあった。

次いで『外科室』(明治二八年六月、「同誌第六編」)
が文芸時評に取り上げられた。

『外科室』——手術を受ける美しい伯爵夫人。夫人は
麻酔をかけられると心中の秘事を洩してしまうと恐れ、
麻酔をどうしてもかけさせない。高峰医学士は夫人の意
の通り麻酔なしでメスをふるうが、夫人はそれに手を添
え乳の下を切り微笑とともに死ぬ。医学士もその日に自
殺を遂げるのだが、医学士と夫人は9年前、若かりし日
に植物園で一度出会ったことがあるという間柄であった。

——というものであるが、この『外科室』について当時の批評を見てみると、鏡花の作品の欠点は、——「其結構が奇妙に過ると其人物稍もすれば不自然ならむとするにある」と言い、『外科室』を自然なものにするには、——「伯爵夫人と高峰医学士の關係を、夫人の結婚の後に置き、相思の情をして實際に近らしめ、姦通の歴史を作らしめよ¹²」というものや、——「唯一回相見たるのみにて相思の情成熟し数年の後再び病室に相見えて毫も減ぜざる¹³」恋愛というものを不自然な恋愛だとするもの等が出された。

右の批評に見えるような「不自然さ」というものは、ざっと一〇〇年も前の人にとつてだけでなく、今の僕等がこの『外科室』を読んでも当てはまるものかもしれない。その発想は奇抜だが、「多くを語らぬ」この作品には、何か漠然としたものが残るのは確かなことだ。このような、読みようによっては、読者の主観で如何様にも解釈できる余地をもつという点に於ては、先の『夜行巡査』の場合も同様であろう。

観念小説一派として

当時の写実主義が主流を占める文壇への鏡花の登場は、観念小説一派としてのものであった。

観念小説とは、鏡花に詳しい成瀬正勝によると「作者が人生に対するある種の観念をあらかじめ抱いて、これを作品の上に具体化するもの¹⁴」であり、「観念小説」という一ジャンルは、島村包月に最初にみられ、包月は観念小説の文学的価値の低さというものを指摘する。また、坪内逍遙とおぼしき記者が、没理想論の立場より、「観念小説が客観的具体的になることを望む¹⁷」と一派を評す。以上のように、前出成瀬によると「観念小説の命名は包月に始まり、その師逍遙によつて承認され、次第に文壇的名称として固まっていた¹⁸。」と云う。

鏡花はこのような観念小説一派としても批評に曝されたのであるが、成瀬によると、鏡花に於ける観念とは、他といささか事情を異にすると云う。

鏡花に於ける観念

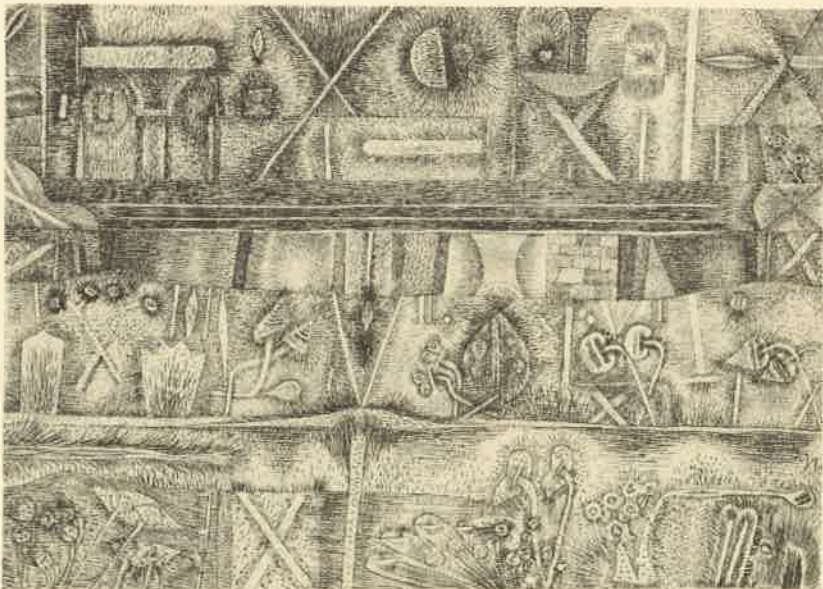
責任観念遂行の為に恋愛の私情を投げうつ『夜行巡査』にしても、心の不義を死によつて自裁する『外科室』にしても、理性と感情、現実と個人の葛藤の中に道義感を貫こうとするものであるが、成瀬によると鏡花の協調しようとする点は、——「道義の勝利を指摘することなく、このような高揚のうちに湧く犠牲精神の沈痛なる感概を浪漫的感情に浸して歌うことにあり、鏡花による観

念の意味は、浪漫的・高揚の手段としてとどまる。¹⁹⁾とする。(傍点筆者)

鏡花に於ける観念への言及のあるものとして斎藤野の人(信策)の『鏡花とロマンチック』というものがあるが、それによると、前掲の包月や逍遙のように、観念的な露呈のみに注目するのではなく、鏡花文学自体の基調を観念性に認めるというものである。

一般に観念とは、人間が心の中に持つ表象なり想念をいうが、そういう意味に於ての観念であれば、鏡花の持つ観念も意味を同じくする。だが、鏡花以外の、例えば、永井荷風や久保田万太郎といった人が描く対象は、少なくとも「どこかに存在するもの」であり、实在性を帯びている。ところが鏡花の描く対象は、「どこにも存在しないもの」であり实在性がない。どこから湧いてきたのかオシヤカ様も知らぬ絵空事なのである。空想の世界なのである。その域を出ない。鏡花の心の中では自然な事なのだが、一旦鏡花の心の外へ出てしまうと不自然になつてしまうもの——そういったものが鏡花に於ける観念なのである。

この鏡花に於ける観念というものが、彼の創作の源泉でもある。この観念の世界は、近代作家中、他に類をみない作家その名を冠した、作家独自の世界を指す固有な



短評募集!!



詞、すなわち“鏡花世界”と呼ばれる。その“鏡花世界”から後に生み出されることになる代表作『高野聖』（明治三十三年）では、人を獣に変えてしまふ“妖女”が描かれ、戯曲『天守物語』（大正六年）でも、美しき“妖怪”が描かれる。妖怪や人事に型の違ひこそあれ、この初期の作品に描かれる“死”や“恋”は、“妖怪”などと非現実という点で繁りを見せる。型を様々に変化する外面は、その“鏡花世界”に還元せしめた時、俄かに妖光を放ち、内面的な繁りを見せる。この鏡花の内面世界たる“鏡花世界”というものは、この初期の二編から、円熟期の作品に至るまで、この作家

の発想の源泉として君臨し、その一貫性は、純粹性さえ喚起するに足る。

『夜行巡査』『外科室』に於ける倫理感・宗教性

『夜行巡査』での思軒調と目される締め括りの文言や、『天下の宗教家、渠等二人は罪悪あり手、天に行くことを得ざるべきか』との『外科室』の締め括りの文言など、一〇〇年も前に発表された作品であり、読者に対し、何らしかの倫理感又は宗教性みたいなものを問うていると考えられなくもない。

鏡花の『無憂樹』（明治三十九年）では、恋愛に於ける

短評を書いてみませんか？

最近一年間に発行された本の中で、自分がこれにせひ人にも勧めたい、または、強く印象づけられた本の短評を原稿用紙（四百字詰二、三枚に）。

★ジャンルは自由、締切は毎月末。

★連絡先 〒565吹田市千里山東3-10-1

関西大学生協同組合本部3F組織部内

『書評』編集委員会

☎387-9998（直通）

☎388-1121（内線 4821）

因縁（余談かもしれないが、鏡花の亡くした母の名らずと彼の妻すずとは同名であった。）や、輪廻、転生というものが描かれるが、前出成瀬によると、それらのものは、鏡花の倫理的思想体系に端を発しているのではなく、鏡花の文学が如何にしても宗教文学的な傾向に近づくものではないとし、この宗教文学的な傾向が排除されたところのものが、鏡花の文学の完成への一要因だとする。

先に見たように、妖怪や人事の型の違いこそあれ、それらは、非現実的なものとして繁りを見せ、純粹なまでの一貫性を見せたが、『無憂樹』に於て、何ら倫理感、宗教性を問うてはいないということ、先の一貫性によって、初期のこの二編に援用しても一向に差しつかえないと思う。

初期のこの二編から、一貫して鏡花の文学には、倫理感や宗教性は存在しなかったと見る方が妥当である。

まとめ

「鏡花に於ける観念」の項で考察したように、鏡花は確かに観念小説一派として文壇に登場したが、観念小派一派に於ける観念というものと、鏡花に於ける観念とは、事情を異にし、包月や逍遙に前掲の時評をもって批判されたという理由は、当時、写実主義が文壇を占めていた

が故のことであり、いた仕方ないことであった。後に、その鏡花に於ける独特の観念が生み出す作風は、後期口マン主義という正当な評価を受けることになる。

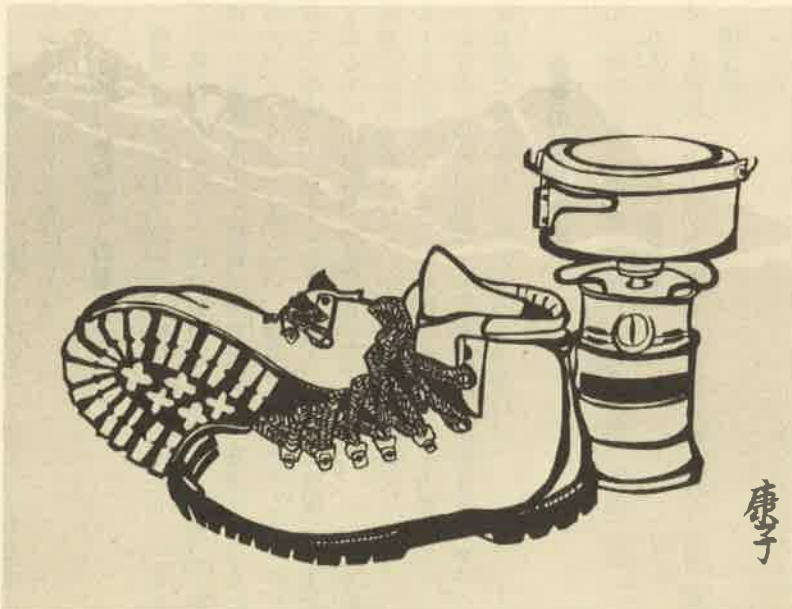
「文芸時評の事」に掲げた『外科室』への二つの時評は、共にテーマの奇抜さは認めるが、不自然さを指摘する点とで一致していた。成瀬はそれを、「鏡花に若書きの文学的造形上の技巧の稚拙さがあった。」と説明する。この成瀬の説明は、鏡花の独特な観念を生かすに足るだけの技巧を要求するという点で、当時の二人の評家と同一のものである。テーマ自体が不自然であるとするのは、非現実なるものを書き続けてきたこの作家に対し、木によりて、魚を求めるが如きであるのは前に見てきた。しかし、扱うテーマが不自然（非現実）であることと、そのテーマを書き表す技巧が生む不自然（不明瞭）とは、別の問題である。もちろん、鏡花は技巧に磨きをかけ、後に『高野聖』等の逸品を生んでいくのだが、そういう作品から見ると、初期のこの二作品は、技巧の上で見おとりがするかもしれない。僕は何ら技巧の稚拙さなど感じはしないが、エライ諸先生が言うのだから、技巧上の稚拙さがあったとしよう。そして、どうだろうそれを逆手にとってみては。肉が薄ければ骨も見えやすくなる。

骨たるテーマに肉たる技巧の付着が少ない分、なほ一層、
瑞瑞しく鮮やかに、鏡花の独特な世界が浮彫りにされは
しないだろうか……。この二編には、そんなシンプルな
魅力がある。僕は内容漠然たることなどもう見えなくな
り、この初期の作品から脈々と生きづく鏡花の独特な世
界の一貫性に、何らしか、純粹なものさえ感じるほどだ。
『夜行巡査』『外科室』には、派々と流れる『鏡花世界』
なるものの片鱗が、まざまざと窺え、その一貫性が生む
妖しいまでの純粹性をこそこの作家の若い息吹と共に味
わうべきが、この二作品に対する正当鑑賞法だと考え
る。

終りに

1、……

鏡花の独特な世界というものを沢山書いたが、鏡花の
文学で忘れてはならないもう一つの柱として、文章とい
うものがある。彼は絶対的な信奉をもって文章（文字と
いった方がいいかもしれないが）、それに接した作家で
ある。それと、バケモノの話ばかり書いていて、長きに
渡って読み続けられるという理由は、鏡花の文学という
ものが、芸術作品であるからなのだろうが、これも詳し
くは、他に譲りたい。



唐子

2、私見、鏡花の魅力

人間の善から悪への転換を抑圧する意志、性への不安定性による人間崩壊、敵は外部にあるばかりではなく自己の内部にもあり、そのようなものとの闘いは、何も芸術家のみのもつ苦悩ではない。作品を手にするものにも共通していて、それが共感を生む。

人間は苦悩や闘いといったものに、年を食う毎に新たな挑戦を受ける。彼が何ら自意識家と呼ばれなくとも。言ってみれば、人は齢を重ねる毎に自己の罪を上塗りしてゆく。それへの浄化の欲求として純粹なるものに対して憧れを抱く。その純粹なるもの一つとして童心がある。齢を重ねなければ、罪も重ねないですむから。子供の絵などに、心魅かれるのもこのようなシステムが一つの原因であろう。そして、僕が、鏡花に純粹性を感じ、心魅かれるのも、この人已浄化の欲求のシステムによるのかもれない。鏡花の純粹性とは、先に見たようにテーマの一貫性を挙げたが、そういうものに心魅かれるのか、また、鏡花自身や研究家が良いエピソード等を読むと、鏡花に子供のような所が感じられ、子供に純粹性となり、そんな子供のような純粹性に心魅かれるのか、自分でもよく分からない。ひよつとして芸術の原始性か、などと大そうな事まで飛び出してくる始末。

しかし僕が鏡花に心魅かれるのは、はなはだ懷疑的ではあるが、その純粹性にあるようだ。

映画「外科室」の事

坂東玉三郎監督で鏡花の「外科室」が五〇分、一本立て、特別料金一〇〇〇円で公開された。玉三郎氏は、鏡花への造詣が深く、映画での映像美は、賞讃すべきものがあった。しかし総じて、「鏡花の「外科室」を原作に選んだ理由」、「原作に忠実であること」、「映像美を現出すること」、「興行用作品に仕上げること」という関係に必然的結合のないまま、作品が未消化に終わっているように思えた。そういった不整合からくる曖昧さというような一種の幻想性（？）も鏡花の幻想性と軌を一にするのだろうか？（そんなわきやない。）

参考のための注釈

- (1) 時文記者（田岡嶺雲？）「時文」欄。明治二五（一八九五）年五月『青年文』
- (2) 上田敏（とおほしき記者）「雑報」欄。同年八月『帝國文学』
- (3) 魯庵生（内田魯庵）「小説家の新潮流（殊に泉鏡花

- 子を評す」同年九月『国民之友』
- (4) 成瀬正勝「鏡花論」昭和一三年『文学』
- (5) 「小説を読む月」明治二八年八月『読売新聞』
- (6) 同年九月『早稲田文学』第九五号
- (7) 同年九月『同誌』第九六号「時文月旦」欄。
- (8) 『明治文学全集21泉鏡花集』「解題」昭和四一年九月
筑摩書房刊
- (9) 前掲(4)
- (10) 前掲(4)
- (11) 「処女作談」明治四〇年『大阪日報』、「おぼけずき
の謂れ少々と処女作」明治四一年『新潮』
- (ひらの たつや・法学部六回生・作曲家・ジャズ研究会)

連

載

おいてけぼり

— 宮本輝試論 X —

芝田啓治

十、「おいてけぼり」生甲斐を求めて（その一）

(1) 仕事について

人間にとって生甲斐とは、一体何であろうか。それは人様々であろうし、国や地域、時代によっても違いがある。現代の日本では、仕事や会社が生甲斐という人も多い事であろう。知らず知らずのうちに働き蜂人間になっっているのかも知れない。日本人の労働時間が他の先進諸国と比較するとかなり長いのが現状だし、労働界に於いて近年最大の問題点となっているのも又事実である。労働省の統計によると、年間総実働時間が平均で二四〇

〇時間を高度成長期では軽く越えていたが、今では二一〇〇時間程度になって来ている。しかし、労働省が目標として掲げていた平成四年度一八〇〇時間達成は、到底不可能の様である。数字から言えば、今も日本人は働き蜂なのかも知れない。でも、それが日本の資本主義を支えて来た大きな要因とも考えられる。

夏目漱石が書いた「道楽と職業」の中で次のような意味の言葉がある。

「道楽と職業を、『己のためにする仕事』と『人のためにする仕事』とに分類出来る」と。この言葉は、極めて明治時代の匂いがするものだと思われる。「人のために

「する仕事」が職業であり、「己のためにする仕事」は職業と見なされないと、この時期の典型的な職業観と見えよう。

「人のためにする仕事」、それは「天下・国家のためにする仕事」の事であり、政治や経済といった分野で活躍する事が前提となっているのである。そして、そのような職業につき、天下・国家を論じ、天下・国家のために尽力する事、更にはその事により衣錦還郷をはかる事が男子一生の生甲斐とでも考えられていたのであろうか。

近代日本の歩みをみてみると、そのような気概が随所に表われているような気がするのである。しかし、それが極めて不規則的であり、偏向的なのが特徴と言えよう。更には言えば、封建的であるというのがその核心をついている。

それは、その人が何処の出身であるか、親の職業や身分が何であるかに大きく左右されているからである。

先ず、政治家について考えてみたい。

一八八五年（明治一八年）、自由民権運動が過激化している時、明治新政府は着実に先を見据えて内閣制度を誕生させた。初代首相から七代目まで、長州と薩摩出身の士族が交互にその座に就いている。大正時代まで広げてみても、六割近い首相が薩長閥で占められているし、



大臣や元帥・議長などの要職に就いた者の約半数が薩長出身だし、維新功勞の薩長土肥となると、有に六割を越すのである。中でも、長州藩は首相一〇名、その他要職には五七名。薩摩は首相五名と他五八名と他藩を寄せつけない。当然の事ながら、旧幕臣や大名で首相になった者はなく、大臣等の経験者も七名と極めて少ない。このように徹底した藩閥制の下では、大臣のみならずその他上級役人についても同様の傾向がみられる。

政界・官界は以上の通りであるが、経済界はどうであるか。当然の事ながら、その影響下にあると言えよう。

資本主義未発達のまま近代に突入した日本にとって、資本家なるものを育てなければならぬという急務が明治新政府にはあった。江戸時代からの政商だけでは、質も層も薄いものと言わざるを得なかった。そこで、土佐出身の岩崎弥太郎が三菱を創設し、又薩摩出身の五代友厚、長州出身の藤田伝三郎らが財界で活躍するのであった。勿論、藩閥政府が陰に陽に彼らを手厚く保護したのには言うまでもない。その顕著な例としては、一八八一年（明治一四年）に起った北海道開拓使官有物払い下げ事件があげられよう。不成功に終わったと言え、薩摩出身の開拓使長官黒田清隆が同郷の五代友厚に、一四〇〇万円を投じて作った官有物をたった三三万円で払い下げよ

うとしていたのであった。当時、国家の税収入のうち九割までもが租税で占めており、百姓の血のじむような税で作ったものを、四〇分の一程度の価格で、それも無利息三〇年払いといった好条件で払い下げようとしていたのであった。これを知った農民の怒りも当然の事と言えよう。明るみに出たのは極稀なケースで、他は表面化せず政商の肥しとなっていたのである。

それでは、もう一方の夏目漱石の言う「己のためにする仕事」というのはどのようなものであるか。彼は、哲学者や科学者や芸術家、そして文学者などをそれに当てはめている。

「科学者哲学者もしくは芸術家の類が職業として優に存在し得るかは疑問として、是は自己本位でなければ到底成功しないことだけは明かな様であります。何故なれば是等が人の為にするに己といふものは無くなって仕舞ふからであります。」（夏目漱石「道楽と職業」）

「直接世間の実生活に関係の遠い方面」（同）
漱石は、これらを職業に対して道楽と呼んでいるのである。

「人のためにする仕事」「天下・国家のためにする仕事」が、薩長両藩を中心とする藩閥体制の下に進められていた事について触れて来たが、この範疇に入れなかった



有能な人々は、一体どの分野でその活躍の場を見出していったのであろうか。

今、明治維新を挟んで生まれた二〇名の文学者・思想家を選んでみたいと思う。彼らは、近代日本の誕生期に多感な青年期を経て、そして自らの仕事を選んでいったに違いない。

- 一八五九年 坪内逍遙
一八六一年 内村鑑三
一八六二年 森鷗外・岡倉天心
一八六四年 二葉亭四迷
一八六七年 夏目漱石・幸田露伴・尾崎紅葉・正岡子規
- 〈明治維新〉
- 一八六八年 山田美妙・徳富蘆花・北村透谷
一八七一年 田山花袋・高山樗牛・国木田独步
一八七二年 島崎藤村・樋口一葉
一八七三年 泉鏡花・与謝野鉄幹・河東碧梧桐

明治時代、それぞれのジャンルで活躍した人達である。彼らのうち一人として薩長土肥出身者はいない。確かに、思想家と呼べる明六社の人々や自由民権運動家の中には、

薩長土肥出身者が数多く見当るが、その人達はやはり「天下・国家を論ずる」人々であつて、決して漱石の言う「己のためにする仕事」の分野には属さない。

今、上表の二〇名の出身地や親の職業・身分について見てみると、その特徴が掴める。

江戸時代末期に誕生している九名のうち七名までが武士の父親を持つている。尾張藩の坪内逍遙、高崎藩の内村鑑三、津和野藩の森鷗外、越前藩の岡倉天心、尾張藩の二葉亭四迷、幕臣の幸田露伴、松山藩の正岡子規と、下級の武士であつた父を持ち、倒幕・維新を経て青年期を迎えた人達である。森鷗外は、七名の中で少々異質な存在である。この点については、後で詳しく触れてみたい。

武家出身でないのは、夏目漱石と耕間の父を持つ尾崎紅葉だけである。

明治元年から六年までに誕生した一一名についても同様にしてみると、やはり七名が武士の子である。南部藩の山田美妙、水俣郷土の父を持つ徳富蘆花、小田原藩医の孫で、父は官吏の北村透谷、館林藩の田山花袋、庄内藩の高山樗牛、竜野藩の国木田独歩、松山藩の河東碧梧桐という事になる。又、下級官吏を父に持つのが樋口一葉。鳥崎藤村の家は、馬籠の庄屋であり本陣をつとめて

いたという事はよく知られている。職人を父に持つのが泉鏡花で、与謝野鉄幹は僧侶であり、歌に親しんだ父を持つている。

以上のように、二〇名のうち一四名まで、すなわち七割までが武家出身なのである。それも、薩長土肥と比べるとやはり見劣りする。又敵対した藩なのであり、彼らが仕事を選んでいく時、出自が問題となつた事は想像出来よう。有能なる彼らは、かつて「婦女子の嗜み」とされてきた文学などの仕事に一生をかけていくには、かなりの決断が必要であつたのではないだろうか。彼らにはきつと心の中に僅かではあつても蟠りだの一種の言訳が必要であり、その心の痛みが時としてはエネルギー源として作用したのではないだろうか。ある種の「おいてけぼり」感を抱きながら、彼らは自らの信ずる道を歩み始めたのであろう。又、それゆえ確かな足跡を各ジャンルに於いて残し得たのである。

(2) 森鷗外の場合

一八六二年、鷗外は石見国津和野藩主亀井氏の御殿医の家に生を受けたのである。津和野藩と言へば、あの長州藩に隣接する小藩で、雄藩を横目で見ながら、又隣接するという好誼に時としては継りながら生きていったの

ではないだろうか。鷗外は、森家の長男として期待を受け、かつその期待に十分応えながら成長して行くのである。特に、代々の仕事である医学を志し、かつ新しい政治、社会体制の枠組の中で官僚として、軍人として、医師として前途に大きな希望・大望を抱きつつ駆け抜けていくのであった。当時の日本は、制度や組織が未整備であるため、欧米列強諸国を手本としながら建設して行かねばならなかったのである。そのような時、二二歳の前途ある青年が宮中に招かれ、明治天皇より激励を受け、ドイツへの留学の第一歩を切ったのである。

陸軍と言えば長州閥。創始者大村益次郎が暗殺された後は、山県有朋が後継者として、当時最大の實力者の一人であった。彼は軍閥係のみならず、三代目の首相として政界に於いても、又その後は元老の一人として日本を動かした人物である。鷗外は、隣藩出身であり、陸軍の創始者でもあるこの山県の近くで働き、活躍したのである。

鷗外は、ドイツ留学を終え帰国と同時に二六歳の若さで陸軍軍医学校兼陸軍大学の教官を務め、三一歳で陸軍軍医学校長となった。その後、台湾や小倉で過ごす事もあったが、四四歳で勲二等重光章を受け、遂に四五歳で陸軍軍医総監、陸軍省医務局長（中将相当）に就き、



軍医としては最高位に上り詰めたのである。そして、一〇年間その職を務め、五四歳の時停年を前にして辞職するのであった。

彼の生甲斐は、官僚として、軍人として、医師として周囲の期待を背に受けて最高位を目指す事であった。しかし、今それを獲得した時、果してそれが本当の生甲斐なのかどうか、その疑問の前で立止まらざるを得なかった。陸軍大将や爵位を更に望んだとしても、それが陸軍軍医総監とどれ程の違いがあるのか。生甲斐とは、彼の場合職業などでは結果的に得られなかったのではないだろうか。

彼は、若い頃からペンを取り、日記を書き、意見をまとめて発表したりしていたが、軍医として新しい体制・制度作りに、そして彼が陸軍に入ってから起った日清日露の両戦争にも従軍し多忙な日々をおくっていたに違いない。しかし、そのような時でも年に一作の割合で作品を書いていた。

一八八九年（明治二二年）鷗外二七歳の時、訳詩「於母影」を、そして翌年文学作品として「舞姫」を世に送り出したのである。以来、軍医としての仕事の合間をみては、年に一作ずつ温めた作品を発表して行くのであった。

その作品創作のペースが一九〇九年（明治四二年）鷗外四七歳になってから、俄然スピードアップしている。

最高位に就いた事が、彼のあらゆる障害を排除く事に繋がったのかも知れない。彼が一九一六年（大正五年）、その職を退くまでの一〇年間に平均すると年五作もの作品を生み出しているのである。勿論、彼の代表作と言われる「青年」や「阿部一族」、「高瀬舟」もこの時期に書かれているのである。彼の創作意欲と環境とが整ったのでなければ考えられない事であろう。

「一体日本人は生きるといふことを知ってゐるのだろうか。小学校の門を潜つてからといふものは、一生懸命に此学校時代を駆け抜けようとする。その先には生活があると思ふのである。学校といふものを離れて職業にあり付くと、その職業を為し遂げてしまはうとする。その先には生活があると思ふのである。そしてその先には生活はないのである。」（森鷗外「青年」）

ここで言う生活とは、正しく生甲斐の事ではないだろうか。この一つ先に何が、きつと自分を支えてくれる何か有待構えているに違いない。長年、見続けて来た夢が叶うに違いないと。そして、今を全力で駆け抜けるのであるが、結果的に自分が得たのは周囲の期待や社会的評価それに名誉だけである。そんなもの一年も、いや三

日もすれば通り過ぎていくものなのである。

「青年」を書いたのは、鷗外が陸軍軍医総監になって三年目の事であり、更にその翌年には次の文を発表している。

「生れてから今日まで、自分は何をしてゐるか。始終何物かに策うたれ駆られてゐるやうに学問といふことに齷齪してゐる。……

併し自分のしてゐる事は、役者が舞台へ出て或る役を勤めてゐるに過ぎないやうに感ぜられる。策うたれ駆られてばかりゐる為めに、その何物かが醒覚する暇がないやうに感ぜられる。勉強する子供から、勉強する学校生徒、勉強する官吏、勉強する留學生といふのが、皆その役である。赤く黒く塗られてゐる顔をいつか洗つて、一寸舞台から降りて、静かに自分といふものを考えて見たい、背後の何物かの面目を覗いて見たいと思ひ思ひしながら、舞台監督の鞭を背中に受けて、役から役を勤め続けてゐる。此役が即ち生だとは考えられない。背後にある或る物が眞の生ではあるまいかと思はれる。」(同「妄想」)

軍医総監では、遂に得る事が出来なかつたものを必死で追い求め、搜そうとするのであつた。悲痛な鷗外の顔が浮んで来る。職業というもの、故郷というもの、そし

て両親を始めとする肉親というものにとられ続けて来たが、ようやく人間鷗外の叫びが文学作品として結実するのである。何故自分が齷齪しなければならぬのか、又実際に来たのか。はつきりと目前に自分の姿が浮んだのであつた。表舞台で主役を演じ、如何に拍手喝采を博したとしても、一旦舞台を下り化粧を落した後の自分を見出し、果して自分の生とは何か、何を追い求めて生きて来たのかといった問いと対峙するのである。不安や焦り、眞の「おいてけぼり」感に苛まれるのであり、打開策を求め、自らに対して挑んでいったのであつた。

人生の大半を費した今となつては、鷗外はソトからの鞭ではなく、ウチなる鞭を自らに打ちながら、眞の生を追い求めたのである。

「夜寝られない時、こんな風に舞台上で勤めながら生涯を終るのかと思ふことがある。」(同)

(しばた けいじ・本学経済学部卒業生)

連

載

日本人教師と在日朝鮮人子女の教育

——在日韓国・朝鮮人の教育問題ノート xv

梁 永 厚

教師は、子どもや青年たちに人間としての真実な生き方を教え、なお、かれらをもつ能力を最大限に開花させ

実を結ぶようにする創造過程の担い手であって、人間に国家の思想を植えつけ、権力の意のままに動くようにさせる「技術者」ではない。もし教師が、執権勢力や時流に阿て真実を歪め偽りを教えるとするなら、もう教師とはいえず、世俗の偽善者ということになる。戦前の植民地教育、在日朝鮮人教育にかかわった日本人教師の多くは、まさにそうであった。いわば国家の教育政策に従って、他民族の民族意識を奪い、日本人になることこそが「幸福への道」である、とする「皇国臣民」化の教育、

即ち同化教育に手を汚し、偽善的な教師、植民地教育の尖兵になっていたといえる。

しかし偽善的な日本人教師ばかりで絶望的であったかという点、そうではなく、数は少なかったが被支配の民衆の側に立場をさだめ、反植民地教育運動を展げた上甲米太郎（一九〇二—？）、上甲に続いた岡本晃（ペンネーム、本名、生没年不詳）らのたまたまいがあった。それは、新藤東洋男著『在朝日本人教師——反植民地教育運動の記録』（白石書店、一九八一年刊）として公刊されている。

同書によると、上甲米太郎は二〇歳で公立普通学校（小



学校)の教壇にたち、二二歳から二八歳までは小規模普通学校の校長を勤めながら、植民地当局が消し去ろうとしている朝鮮民族の独立を願い、その民族のことは生きさせ続けようと、自ら朝鮮語を習得し、朝鮮語でもって朝鮮の子どもや教師に向き合っている。さらに「平和に朝鮮人を愛する生活に一生を捧げること」「朝鮮の土となるように、大きな野心を求めず、その日、その日を完成すること」に努め、教師、校長としての仕事を進める傍ら、朝鮮人の教育は朝鮮人の手だと考え、有志から奨学金を集めて、貧しい家庭出身の教え子を師範学校へ入学させ、その教え子を軸に師範学校生の中で反植民地教育の研究会を組織するよう指導した。なお自らも天皇制権力と、その教育政策に反対する教育実践および理論の研究誌『新興教育』の読書会を主宰しながら朝鮮教育労働組合の組織をはかった。そして上甲は、植民地教育に携わっている日本人校長や教師について、次のような批判をしている。

「ある年の校長会議の時のことだ。内務部長が『教育を天職と心得てゐるならば、夏休全部私事旅行など出来る筈がない。是非やりたいといふような人はむしろ止めてもらったがよい。そんな人は教育以外の方へ向く人物であるのだから。他の仕事なら心から乗気になつてやら

ぬと云ふことは能率に影響して、仕事が八割しか出来ぬと云ふだけですむ。教育という仕事は児童を害することに
なり、結果はむしろマイナスとなる。由々しき問題である。』と夏休中私事旅行に關しての問題からこんなこと
になった。すると、『部長殿のお説有り難く拝聴、吾々
帰校の上は御旨を体し云々』と大真面に立ち上つてお答
へを申した男がゐた。それからでもあるまいが、次の年
その男は榮転した。さて、その天職を有り難く守つてゐ
る校長達は、朝鮮に於て如何なる教育をしてゐるか。

『朝鮮へ何しに來た。金を溜めに來たんじゃないか。
そうでないと断言する奴がゐるとしたら偽善者だ』とい
ふことをきかされて、俺達はビックリしたものだ。こん
な野郎が朝鮮に來てゐる連中の大部分だ。新任した某が
校長から金を借りて飯代を払つたら、次の月給日にちゃ
んと差引いてあつた。それだけなら分るが、三分の利息
も取つてあつたといふからおどろく。だが、朝鮮では月
三分はおろか、一割二分なんてのが珍らしくない。まさ
か校長の総てとは云へぬが、誰も小金を貯めており、一
萬二萬といふはなしは各郡で一人ぐらひはきく。月々本
職以外の収入の方が多いなんてこともサカンな噂だ。

プチブル生活をしてゐる彼等、日本帝国主義の手先
を以て自ら信じてゐる彼等に、ペスタロッチの愛の百分



の一も、いや一分子だつてありやしな。彼等の生きてゐることの中心は、只金を残すことにあり、酒を飲むことにあり、女を金で買ふことであり、他の何物もありはしない。

たまに何かやつてゐる奴もある。文檢の準備か、認められたための利己的なもの以外に、児童に対する愛から、被圧迫民族を解放しやうとする熱情から出た教育が朝鮮に一つでも行はれてゐるか。卒業生指導校なんでものが出来て、やつきとなつて彼等はゴマカシにかかつてゐる。手取三分にしかならぬと云はれてゐる小作（朝鮮に於て土地は一割五分以上の利廻りとされてゐる。地価の値下りを別としても）又小作業者とも云ふべきもので、他人の小作を自らは土地に手を染めないで中間搾取する手がゐて二重の搾取、月一割二分といふ高利、それらを放つといつて、多少でも物識りの卒業生が何で土地に土着してゐやう。これが朝鮮の校長（内地人）連の教育である。

さて一般教員は何をやつてゐるか。田舎まはりをしてゐる俺の過去八年に、身に沁みて痛感したことは、実によく欺瞞が徹底してゐることだ。だが、彼等をその欺瞞の夢から振り起す強大な力が、日に日を追ふて、田舎の片隅にも押し寄せて来た。労働者の、農民の、学生の闘

争！朝鮮の教員大衆も目覚めずにはゐないぞ！俺達の背後には、今全鮮に動く偉大な力がある。やるぞ！力強く。此処にも『新興教育』の読書会をもち上げてみせる。

内地の教員諸君！朝鮮にも俺達が戦つてゐることを覚えてゐてくれ！

（『新興教育』第三号、昭和五年十一月刊所収、原文のまま）

この上甲米太郎は、一九三〇年一二月、治安維持法違反により、檢挙され、裁判の結果下獄し教職を追われた。その裁判過程で証人として法廷に立たされた朝鮮人の教え子や教師は、みな上甲を慕つていたので、誰一人として上甲に不利な証言をする者はいなかつた。上甲が集めた奨学金で京城師範学校に入学し、反植民地教育研究グループの中心的役割を担つた趙判出は、上甲とともに下獄し、出獄後も師弟愛にちなむ親交を持続した。時が流れ、かつて在朝日本人教師がとりくんだ反植民地教育のたたかひの発掘は、もう無理だといえるが、上甲を中心としたたたかひは、暗黒の中の一糸の光として、貴重なものである。

- (1) 『日本帝国主義の植民地教育と闘つた在朝日本人

教師の闘いの記録』（九州大牟田の人権民族問題研究会、一九六六年刊）の補筆訂正版である。

(2) 『新興教育』誌は、全日本教員組合準備会の中堅メンバー、浅野研真、山下徳治、本庄陸男、池田種子等が、文化団体を標榜して設立（一九三〇年八月）した新興教育研究所の機関誌として、一九三〇年九月に創刊された。主要な執筆者には、研究所設立メンバーと中田貞蔵、官原誠一、楨本楠郎、田部久、在日朝鮮人の李北満等がいた。

(3) 上甲の教え子で京城師範学校生徒の張判出と、京城師範学校生徒の菊地輝郎、東京の新興教育研究所の山下徳治、西村節治らが検挙され、各懲役一年または二年を科された。

さて、戦後の日本人教師と在日朝鮮人子女の教育に即してはどうであったのだろうか。いわば平和憲法、教育基本法にちなむ教育改革により、天皇制国家主義の教育並びに植民地民族にたいする同化教育（教育侵略）はなくなり、日本人教師の総体は、かつて欺瞞的な教育に携わった自省・自己改革をはかりながら、民主教育を担う教師へと転身したといえる。その転身にあって旧悪の教育侵略の方は、どう省みられたのであろうか。およそ

のところは次のようであった。

戦後まもなくより、在日朝鮮人は自主的な民族教育即ち教育の独立を達成しようとした。ところが、かつて教育侵略により中・高等教育をうけることを制約されていたので、教育建設の人材が不足していた。その人材不足の民族教育に協力、連帯した日本人の学者、文化人、教師たちが少数ながら存在した。朝鮮人連盟中央本部の教科書編纂事業、同連盟大阪本部の教員養成（朝連師範学校）などに協力した学者、文化人は四〇名ちかくであり、大阪の朝鮮中学校はじめ各地の中等教育機関で、数学、理科、英語、日本語、美術などを教えた教師は、全国的に七〇名余りに達する。この人たちの教育実践の過程では、異民族の教育に接する気苦労があったであらうし、また朝鮮の子どもの喜びや悲しみなどが、よく見えたはずだと思えるのに、なぜか、その記録は世にでない。残念なことである。

一方、戦後初期の日本の公教育の場には、朝鮮人児童生徒約一〇万名が在籍したままであった。その子どもたちと多くの日本人教師が向き合ったはずである。その教師たちのなかからも記録や手記の発表をほとんど見うけない。戦後五年経ってから始められた日教組の教研運動のなかでは、総じて「日本の子どもと同等に扱い、差別

をしない教育であつた」と反省されている。したがつて戦後初期の日本人教師は、真意のほどはともかく、客観的には旧悪の植民地教育についての省察を欠き、朝鮮の子どもの民族的属性を考慮しない教育観で対していたといえる。

日本人教師のなかで、かつての教育侵略を自省し、朝鮮の子どもの民族性の尊重といった民主的、人権的な教育理念にちなむ、教育の実践と理論を構築する運動が起るのは、皮肉にも日本の教育法令に基づき、朝鮮の子どもを日本人として教育することを建前にした公立の朝鮮人学校が、全国に三〇校ちかくも設立された一九五〇年代からで、日教組の教研運動と並行している。

公立の朝鮮人学校は、朝鮮人の自主教育を政治教育視した、文部省の朝鮮人学校閉鎖措置の結果、朝鮮の子どもを多数受け入れることになった公立学校の教師や父母からだされた、教育現場の混乱を招くとする民族的エゴイズムと、自分たちの子女教育の独自性を守ろうとする朝鮮人父母の強い要求に挟まれた各地方の教育委員会が、文部省の意向に逆らつて、朝鮮人側と朝鮮人学校の校舎および児童生徒を、そっくり教育委員会の管理下に移すとり決めをし、一時凌ぎに設立した学校である。したがつて存立した期間は、東京の一四校は一九四九年一二月





から一九五五年三月末までの五年間余り、大阪とその他の地方は一九六〇年代初までの一〇年余りであった。

これら公立朝鮮人学校における教師と子どもの形式的な関係は、かつての朝鮮総督府の学校における教師と子どもの関係と変らなかつた。いわば教育委員会より日本人の校長と教師が送りこまれ、朝鮮人教師は教育委員会の審査を経て任用された専任または非常勤の講師が、各校に数名ずつ赴任した。そして日本人教師は、総じて日本の教育法令に従い朝鮮の子どもを教育する任を負い、朝鮮人教師は、日本の教育法令の枠内で民族的な教育を確保しようと努めた。この両者のせめぎ合いが、朝鮮の子どもをなかにおいて続くなかで、日本人教師は二分化していくようになった。

その一つは、日本の教育法令に従うことを名分に、朝鮮の子どもたちの魂を傷つける、戦前と同じ考え方の教師たちであった。この教師たちのなかには、朝鮮人教師の民族教育を確保しようとする努力のまえに立ちはだかり、「日本人の税金で運営されている朝鮮人学校は、共產主義教育を行っている。気に入らない日本人教師を吊し上げ、学校から追い出そうとしている。朝鮮語を使つて授業し、国語（日本語）は無視されている」と、事実

に反した内容で、朝鮮人教育を誹謗した人や、一般の公

立学校教師になるつなぎで赴任し、教育委員会のいいなりに動き、その行賞で一般校へ転任して行く人もいた。

もう一つは、朝鮮の子どもや父母の要求を誠実にうけとめ、民族教育への理解を深め、日本政府の抑圧政策から朝鮮人教育を守るたたかいにふみきった教師たちであった。この教師たちは、朝鮮人学校公立化のねらい（教育侵略の再現）を的確につかみ、朝鮮人教師と連帯し、子どもたちの心情を汲みいれた教育実践と、日本人教師のうちにある民族的エゴイズムと大国主義の思想を克服する方向での研鑽をつみながら、在日朝鮮人教育にどのようなにかかわっていくべきか、といった理論の確立をはかった教師たちである。

後者のたたかいを続けた教師たちのなかの手記としては、東京都立朝鮮人高等学校で教鞭をとり、同校がなくたって後は、区立中学校の教師を勤めながら朝鮮問題の研究を深め、富山大学文学部の朝鮮語、朝鮮文化コースの教授になった、故梶井陟氏の『朝鮮人学校の日本人教師』（日本朝鮮研究所、一九六六年刊）。大阪の市立西今里中学校（朝鮮人生徒のみを収容）で教鞭をとり、同校の私立学校移管後は他の中学校へ移り、さいごは市立歌島中学校の校長を勤め定年退職をされた森田恭介氏の『日本人教師が辿った在日朝鮮人教育戦後（大阪）史』

（朝鮮資料研究所、一九八〇年刊）などがある。

この二つの手記は、一九五五年まで北朝鮮系の在日朝鮮人運動が日本共産党と結ばれていた時期（この時期の日本共産党は、在日朝鮮人を少数民族と捉え、日本の革命運動に従属させるという、理論上の誤りをおかしていた）を背景としているので、日本人教師と朝鮮人教師とが、同一の組織（東京の場合は都教員組合連合傘下の朝鮮人学校教員組合を結成、大阪の場合は大教組傘下の大阪市立中学校教員組合の分会を結成）の組合員となり、朝鮮人教師も日本の国政にたいし反対運動をしたことを触れているが、重要には日本人教師が朝鮮人教育にどうかかわろうとし、実践をしたかが真摯に記述されている。それは現在日本の公教育の中にある朝鮮人子女の教育の方向を包括しており、朝鮮人子女にかかわっている日本人教師に励ましと教訓を示す内容となっている。次に少し長くなるが、森田恭介氏の手記の一部を抄録して今回の稿を了えることにしたい。

* * *

大阪市立西今里中学校一一年間の日本人教師の営為は、はた目には徒勞に見えたかもしれないし、自主化の後、二〇年近い歳月を経た今日、「民族教育の妨害者」という評価によってかたづけられる人たちもある。しかし、当時

日本人教師が何を考え、何をしてきたかを語らねばならないと思う。

西今里中学校赴任当時のこと

私が西今里中学校に赴任した翌年、一九五四(昭二九)年の初めごろから、政府は教員の政治活動禁止法案もちだしてきた。当時、組合の評議員には教務主任の日氏(朝鮮人教師)が出て、さかんに活躍していた。(朝鮮人教師が、日本の教員組合の分会評議員に選ばれるということは、今から思えばまことに奇異なことだが、当時はそれで通用していた。)

この法案を世論に訴えて粉碎してしまわねばならないということ、その反対闘争のため、市主教(大阪市中学校教員組合)では、各分会内に職場運営委員会をつくることを指令した。西今里でもそれに応じ、私も六人の委員の中に選ばれた。

この職場運営委員会を単なる闘争のための委員会として解散してしまわず、日常の職場の文化活動を推し進めるための、永続的な会にすることにした。そして、まずその皮切りとして、委員会では、私に「西今里に勤めて以来六か月間の感想を、日本の学校での経験と比較しながら話すこと。」を決定した。



実際、赴任以来の六か月間、この学校の中で次々に起る現象は、当時の私にとって、面くらうことばかりで、どれもこれも教育の場の仕事としてふさわしくないことばかりに思えた。なまじ七、八年の公立学校での経験があるため、なおのこと馴染めなかったのかもしれない。そういえば、二〇人あまりの日本人教師のうち、普通の公立学校の経験者は、私のほかには川村校長と、校長代理をなれる藤谷さんだけであった。

その年の暮、たしか一二月の末であったと思う。祖国復興募金のカンパ活動が計画された。「祖国朝鮮は戦火に焼かれ、国民は塗炭の苦しみにあえいでいる。在日朝鮮人は祖国の復興建設のために、それぞれの立場で協力せねばならない。学生といえども、祖国のため街頭に進出して、この募金のために立ち上がらねばならない。」そういう意味の説明があった。

祖国の運命にそのままつながる朝鮮人にしてみれば、当時の行動は、非常の時代に生きる民族として、当然のことであつたらう。しかし日本人はちがう。日本人は明らかに別の歴史と運命になつてゐる。日本人は朝鮮人ほどに民族の運命の切迫を意識できない。それをむりやり同じベースにまきこみ、同じ意識に引きこまねば満足できないようなやり方は、私には全く納得できないこと

だつた。しかし納得できないままに、私も担任の生徒を一〇人ばかり連れて、街頭募金に出かけた。一週間にわたつて、毎日市内六か所へ交替で出勤して行き、翌日の職員朝礼で募金高が発表された。

西今里に勤めている限り、このようなことも勤務の一部だと思つて協力してきた日本人教師の心の底に、民族の相違を無視し、混同した無理が次第に積み重なり、内攻していったことも、また見のがせない事実であつたといわねばならない。

このような時期に、私はそれまでの疑問を出す機会を与えられた。「日本の子供と朝鮮の子供」という題で、それまで思つていたことを洗いざらい出してみた。

日本の子供と朝鮮の子供

一、序

1 この会をもつに至つた経緯

◎職場運営委員会において（三月七日開催）

- (1) それ以前の、会のあゆみについての反省
- (2) 政禁法反対に対して、いっそう強力な運動の展開が必要なことについての再確認
- (3) この会を永続化すべきであるとの意見
ア、現に直面する教育の場、環境、その対象

となる生徒、教育方法に対する研究・改善
イ、教師相互の融和の推進

(4) 会の構成についての再検討

2 このテーマ「日本の子供と朝鮮の子供」を選んだ理由

(1) 我々教師の研究研鑽の対象は、常に生徒であること

ア、本校生徒の「性格」の特異性

イ、本校教員の「構成」の特異性

ウ、「我々はどのような子供をつくりあげようとしているのか」ということが、現下における我々すべての課題ではないのか

(2) 公立学校としての制約

ア、本校は勿論朝鮮人子弟に民族教育を施す学校であるが、「現在、日本に在住する朝鮮人であるという意義」について考える必要がある

イ、「日本人は本校に対して、何を望み期待しているのか」——公立学校の意義

二、「日本の子供と朝鮮の子供」

1 民族の相違を殊更に論ずることの是非

(1) 一つの立場

ア、本校の生徒は、日本の子供とほとんど全く同様の社会的条件の下で生活している

イ、その思考過程はきわめて日本人である

ウ、使うことは、容貌、皮膚の色、服装、感情の表現等、外面的に受ける印象は、日本の子供とほとんど同様である

(2) いま一つの立場

ア、「人間は国民や民族である前に、先ず人間である」

イ、完全な人間の育成——全人教育

(発表者自身の、教師としての立場は、今までここにあった。)

(3) 第三の立場(特に日本人教師の立場として)

ア、日本人教師である「我々」が、この教育の場において、その対象としているのは、明らかに「我々」とは別の祖国と別の使命をもつ民族であることを、はっきり自覚しなければならない。

(共通する運命はあるにしても)

イ、日本人教師として、本校生徒の将来に対する期待——「日朝親善のくさびたれ」ということ



〔日本人教師として信念の所在〕

(4) 第四の立場

ア、朝鮮人としての自覚と誇りをもたせること

イ、朝鮮人として生まれたことに悦びをもた

せること——宿命からの逃避は、自己の

生命の抹殺と同義である

ウ、新しい伝統および文化の形成者たる資質

の涵養——全人教育の必要性

エ、拙速は不可——「ローマは一日にして成

らず」——ファクション化のおそれなきか

職業選択の自由（基本的人権）

2 本校の今後の課題（是正せねばならぬ諸点）

(1) 環境の整備↓清掃の徹底

(2) 教員相互の融和——特に進学問題にから

んで

(3) 文化的クラブ活動の必要性

(4) 楽しい学校・明るい学校へ

以上のようなプリントを配って、それに基づいて三分ばかり意見を述べた。今読みかえてみると、現実を知らぬ独断と思いが随処に見えておはずかしい限



りだが、それでもむきだしの若さと熱意だけは認めてもらえたのだろうか、これをめぐって激しい討論が展開されたことを覚えている。このとき問題になったのは次の二点であった。

◎ 「人間は国民や民族である前に、先ず人間である」と規定しているが、はたしてそうであろうか、という点。

これは朝鮮人教師から出された意見で、朝鮮が未だ真に解放されていない以上、真の解放、真の独立をかちとるまでは、人間よりは民族が優先されねばならない。また流動する現代社会にあつては、単に一般的な「人間」は存在せず、すべての人間はいずれかの民族、いずれかの国に属する。従つて、民族であり、国民であることをはなれて人間を問題にすること自体、空論である、という趣旨であつた。

◎ 「朝鮮人としての自覚と誇りをもたせる」というが、それが何によって可能であるか、という点。

これも朝鮮人教師から私に対して向けられた質問であつた。これについては、「朝鮮の歴史をありのままに教えることだ。」と答えた。さらに同教師から、「それもあるだろうが、それよりも朝鮮が先進民族であることこそが、朝鮮人としての誇りなのだ。」

という意見が出た。そのときの私には、そのことは意味が理解できなかった。そのことよりも何よりも、この討論のあいだじゅう、日本人教師の誰もが終始無言であったことが、私には情なかつた。

しかし、この発表によって、日本人教師たちも、自分たちが教える「子どもへの愛情と責任」の立場から、この学校でも主体的にとりくむ余地がある、いやとりくまなければならぬのだ、という自覚ができてきたのではないかと思つてゐる。

西今里朝鮮中学校の日本人教師

——日教組教研長野大会へ向かつて——

西今里中学校は、このときの私の発表を軸として、その後一年たらずの研究と実践をもつて、日教組第四次教研（一九五五（昭三〇）年一月）に私を送り出した。私は、その報告書を「民族独立のための教育——その実践と方策——」としてまとめた。その序文は、次のように述べてゐる。

「在日朝鮮人教育は今危機に立つてゐる。この時に当たつて、この教育に携わる者が考えねばならぬことは、外的な圧迫の除去は勿論であるが、何よりも先に我々内部にある障礙を呵責なくえぐり出し、

その対応の方策を立てねばならないということである。

発表者は昨年九月西今里中学校に赴任した者であるが、自分が現にあつた生徒に如何に対処するか、という位置から自分の仕事をはじめた。明らかに今までの日本人子弟に対する取り扱ひとは違わねばならない。朝鮮人の教育は、日本人にはできないのか。朝鮮人の教育が、日本人にもできるといふ立場に立つまでの過程、これは本校教員の三分の二の多数を占める日本人教師の課題でなければならなかつた。

かつ、日本人教師と朝鮮人教師が共通の目標をもつという意識の確立、教師の意識の向上的な統一のないところに、この教育の発展は望み得ない。以上の点を確認した日朝両教師が、自らの立場に対する自覚の下に進んできた西今里中学校の過去一年間の実践記録を報告したいと思う。その中から、日本の学校の教師が、その職場での重要な問題点、重要でありながら見過ごされてゐる点などを、発見されるのではないかと考えるのである。それは、過去一〇年の日本の中学校教育を経験した発表者の反省のうえに立つてのことばである。日本人教師である発表

者は、朝鮮民族の教育を守る研究実践の過程を通じて、日本の教育に如何に寄与し得るかを、常に念頭におきつつ研究を進めてきた。ということは決して在日朝鮮人教育をないがしろにするのではなく、日本の社会の変革なくして、我々の民族教育そのものもあり得ないと考えたためである。日本人は今、直接的な危機の段階にはない。そのことが、ますます日本人をして日本を忘れさせることになっていく。

日本人教師は、本校との深い愛情と責任のつながらの中で、朝鮮人教師と手を携えて在日朝鮮人教育を守り、推進し、そのことにより、日本の平和と真の独立を獲得するためのひとつの捨石となり得れば望外の喜びである。我々は今、「朝鮮民族の誇り」を基盤として、民族教育を守りつつある。「朝鮮民族の誇り」は、新しい「日本民族の誇り」と異質のものではない。日本人は日本に絶望することをやめねばならない。

上述のような反省と実践の中から、生徒綱領草案が生まれ、その全般的な審議を足がかりとして、「在日朝鮮人の教育」を確立しようとしている。

過去の教研の成果のうゑに立ちつつ、前述のような過程を経た我々の研究は、決して完成したもので

はないが、現状を報告して大方のご批正にまちたいと思う。」

この序文は市中教教研の段階で書いたもので、その後の分会の集団討議の結果削除することになったのだが、当時の私の心境を述べたものなので、掲載しておく。

「報告書」の「本論」は、さらに次のように述べる。

「在日朝鮮人の民族的諸権利が、とみに剝奪されているという条件の下で訴えられた「民主民族教育の権利を保障せよ。」とのスローガンは、切実な要求を反映したものであり、その貫徹のためには幾多の困難な障碍を乗り越えねばならなかった。

しかし、危機にあるのは朝鮮の民族教育のみならず、日本の民族教育そのものでもある。

即ち、全く無権利な在日朝鮮人の状態とかわめて近い位置に引きずりこまれようとしている日本民族の、独立を求める教育が崩壊の危機に曝されているのである。このような条件は、朝鮮人の民主民族教育が、日本の『民族独立のための教育』の一環であり、不可分の関係にあることを特徴づけている。尚、本校が公立である性格と、朝鮮人学校であるという



性格との交錯した二面性は、我々に些かの混迷を起こさせる要因であった。我々の過去一年間の教育実践を、便宜上二期に分けて分析してみる。」

この「本論」の書き出しの中にある「朝鮮人の民主民族教育が、日本の『民族独立のための教育』の一環であり、不可分の関係にある。」という主張が、「在日朝鮮人運動の転換」の時期を迎えるまで、とくに大阪の朝鮮人教育の推進にとって大きな障碍となるのである。

「第一期（一九五三年秋まで）」

この時期における朝鮮人教師・父兄・生徒の要求は「母国語による民族教育」であった。これは勿論、本質的に正しい主張であったが、この一面のみが強調されたために、この点で日朝教師の間に意思の不統一を生み出した。即ち、

- 1 朝鮮人生徒の教育は朝鮮人教師でなければできないのだ、という一種のセクトとあせり
- 2 「どうせこの学校では、自分たちは何もできないのだ、与えられた仕事だけして月給を貰っておればよい」という、日本人教師のあきらめからくる事なかれ主義

3 「公立」の枠内に留まらねばならないという制約性と、枠をこえて教育内容に民族的独自性を充実させていこうとする主張

4 日本人教師の朝鮮民主主義人民共和国に対する無理解と故なき偏見

以上のそれぞれが、原因・結果をなして作用し、平和教育と民族教育との統一的把握が妨げられた。」

以上のような西今里の「風土」の中にあつて、私の最大の関心事は、日本人教師と朝鮮人教師との曖昧な妥協的雰囲気をいかにして排除していくか、という点にあつた。朝鮮人教師は、日本人頼むに足らず、と思ひ、日本人教師は、あきらめ切つてゐる。それでいながら、表面的にはきわめて親善的なムードを漂わせてゐる。そんな曖昧で不健全な風土は、決して生産的でない。それよりも何よりも、教育と名のつく場に、あつてはならないことだ。——当時の私をかりたててゐたものは、このような主張であつた。

「第二期（一九五三年末—一九五四年）」

平和教育の危機が訴えられ、日本全国の教師が、教育二法反対闘争に立ち上がったこの時期には、本

校においても各教師が自己の階級的性格——教育労働者としての位置——を認識しはじめた。

平和と民主主義の教育はこどもの幸福と権利を守るものであり、こどもと父兄の要求に立脚しなければならぬ。朝鮮人父兄とこどもの主要な要求のひとは、かれらの民族的要求——母国語・歴史・文化等の民族的独自要求であり、これは朝鮮人教師によらなければならない。

他のひとつは、階級的要求——日本の民主化・日朝両国民の友好団結である。日本の平和教育を破壊するものと、朝鮮人の民族教育を抹殺しようとするものは同じものであり、「民族教育」の完全な保障を獲得する途は唯ひとつ、共通の障壁を取り除き、日本民族の解放を闘いとることである。これは日朝教師の双方に課せられた教育労働者としての歴史的任務である。

民族教育についてのこの二つの側面が、我々の集団討議の中で明らかにされるにおよんで、この点で意思の統一が生み出されるに至つた。次にこの期間における教育実践の事象を、右に述べた経緯をふりかえりつつ順を追つて述べていくこととする。」

「I（進学問題） 本年三月、高校進学希望者につ

いては、朝鮮高等学校へ進学するよう指導することに職員会議で決議された。原則的には、本校卒業生が、在日朝鮮人教育における六・三・三制の一環としての朝高へ行くべきであることは確認されねばならない。即ち、朝高は、在阪朝鮮人父兄の熱意が作られたものであり、教育は如何なる場合においても、父兄・生徒の正しい要求にもとづいて行われねばならぬが故である。

それにも拘らず、卒業生担任の一部、日本人教師をして、その担任する生徒を日本の高校へ行かせるのが正しいと思わせた原因は奈辺にあつたか。

それらの教師もこどもの幸福を守る立場に立つての行動であつたには違いないが、それは現象面にとられて、その生徒にとって真に本質的な幸福が何であるかを見失つていた、という批判を受けねばならない。

そのころ、日本人教師は、朝鮮人運動については「お客さん」のようなものであつた。朝鮮人運動の流れに身を挺さないまでも、その運動の流れを理解しないかぎり、「お客さん」の域をこえることはできない。その意味において、日本人教師の意識は一般におくられていた。「お客さん」に主体性を求める

ことは無理である。朝鮮人教師の、民族教育に対する情熱は、生徒にとって圧迫感を与える。生徒は、日本人教師に緩衝地帯を求める。——そのような状況があつたことは確かである。私は、日本人教師に対して、この学校での主体性を求めた。私自身が主体的でありたいと望んだ。

「自分たちにも、この学校で仕事ができるのだ。」という自信、それがその当時の西今里の日本人教師にとつて、何よりも必要だつた。それがなかつたら日本人教師は、西今里にとつて有害無益な存在に墮してしまふ虞れがじゅうぶんにあつた。「公立のわく」の中にあつた当時の西今里にとつて、そのような存在は、在日朝鮮人の民族教育を二重にも三重にも妨害することとなる。私を含めて、西今里の日本人教師がそのような存在に墮することを、私の「教育的良心」は認めることを許さなかつた。「朝鮮民族としての尊厳を保障することこそが、真のヒューマニズムである」ことを、日々の、こどもと保護者と朝鮮人教師との接触の中で理解はしていたつもりなのだが、なおかつ不合理な合理づけをしなければならなかつた。当時の日本人教師の心情を、多少は理解してほしいと思うのである。



「Ⅱ(少年団活動) 地域での少年団活動も、地味

ではあるが着実に推進されてきた。初め、野球競技を通じて、本校生徒と日本の学校へ通学している朝鮮人生徒との提携が行われ、そういう中から日本のこどもとの交流が進められてきた。その一つの現れは、最近の「大阪府日朝仲好し子供野球大会」である。このような事例は生野区舍利寺の日本小学校と朝鮮小学校との間にも見られる。日本小学校が、日朝親善のために朝鮮小学校の児童を迎えた時、会場に日の丸を掲げて歓迎することになったところ、日本のこどもの中から、日の丸だけ掲げて朝鮮の旗を立てなければ歓迎にならないという意見が出て、両国旗を立てたということである。

—このように、偏見のないこどもたち相互の間では、何の障壁もなく自主的に提携融和が進められているのである。

報告書はさらにこの後に、「生徒綱領草案の審議」をあげている。生徒綱領の審議がなされた時期は一九五四(昭二九)年九月から一〇月にかけてであったが、ちょうどこのころ東京都立の朝鮮人学校一五校の自主化移管をめぐって、朝鮮人教育に対する新しい弾圧の危機が叫ばれていた。教員相互のいっそう強固な意思統一と、生

徒の自主性のいつその昂揚を必要する事態であると考
えられた。

生徒の自主性はこのようなとき、学校をささえる支柱
であり基盤でなければならぬ、と学校ぐるみの「生徒
綱領草案」の学級審議を求めた。草案は一〇条からなっ
ているが、特に重要と考へる問題を含んだ条文(第一条)
「私たちは祖国と民族を愛しよう。」をめぐって、文字通
り全校が沸きかえった。

ここで留意していただきたいことは、このときが一九
五四(昭二九)年の秋であること、生徒の構成について、
解放以前から在日している子どもと、日本の敗戦後に来
日した子ども・朝鮮戦争の最中や休戦後に来日した子ど
もたちが、同じ学級の中にいるということ、そして、民
族学校(初級学校)の経験をもつ者と、公立小学校だけ
で学んできた者が混在していたことである。

このような学級構成の子どもたちの中へ、「祖国と民
族を愛しよう。」という命題を真正面から提示したので
ある。激しい討論が巻き起こったのも当然であった。子
どもたちの「祖国」に対する考え方は、要約すると次の
ようになった。

- 朝鮮民主主義人民共和国
- 大韓民国

- 南北に分裂する前の朝鮮
- 南北が完全に統一された後の朝鮮

○ 濟州島(この意見の中には、出生地と混同したも
のと、祖国などどうでもよく、自分の生まれた故郷
あるいは父母の出身地こそ、愛すべく頼るべき土地
だ、という意味がうかがえた。)

ここで注目すべきことは、大韓民国を祖国だとする生
徒は、きわめて信念的に言い切っていることであつた。
そしてこれらの生徒は、例外なく、この時期からわずか
前に、親や親戚を頼って韓国から渡ってきた子どもたち
であつた。そのなかには、濟州島の内戦(筆者注、一九
四八年五月一〇日実施の南朝鮮単独選挙に反対した濟州
島民の武装闘争。四・三事件と呼ばれている)を、親や
兄弟姉妹を殺されるという事実によつて体験しているこ
どももいた。従つて、大韓民国が祖国だ、ということ
はきわめて自然なことであつて、その発言が、西今里の朝
鮮人教師にとつて「困つた」発言であることなど、まる
で知るよしもない。

「祖国」というような、人間性の本然に属する重要な
問題を、形式的、観念的におしつけようとすることは、
きわめて危険である。それらの生徒をして、「自分の祖
国は朝鮮民主主義人民共和国である。」と信念的に思う

ようにさせねばならぬことは当然であるが、それには親切で辛抱強い指導が必要である。素ばくな数多い疑問に答えてやらねばならない。当時の私のクラスで、「祖国」に対して一致した規定がなされて、お互が正しくそれを知り、愛することができないし、落ち着いて何もできない、という意見が出た。私は、「各自が今それぞれ心にもっている『祖国』を愛し、発展させる努力を通じて、正しい祖国を発見し、把握しよう。真実はひとつしかないのだから。」と指導した。

「報告書」に、私の私見として、「今の段階では、第一条は『祖国の平和的統一のために努力しよう。』という進み方の方がよいのではないかと考える。」と書いている。

この「報告書」は最後に、今後の「方策」を次のようにまとめている。

◎ 方策

しかしながら我々の教育活動は、まだ多くの欠陥をもっており、充分とはいえない段階にある。我々が当面、更に努力すべき諸点を次のように要約する。

I 父兄・生徒の学校教育に対する要求に耳を傾けること。

II 父兄・生徒の要求に立脚した教師間の徹底的な

話し合いを推し進めること。

III 系統的な朝鮮人の民族教育のために、朝鮮人

小・中・高校教師間の話し合いをもつこと。

IV 日本人学校との生徒・教師の交流による相互理

解と、日朝両民族の友好団結をはかること。

V 組織的には、日教組および在日朝鮮人教育者同

盟との、中央および地方における綿密な連携を保

つこと。(組合内に朝鮮人教育対策部を設けるこ

と。)

我々はこれらの努力のうえに、更に完全なる在日朝鮮人の民主民族教育を実現させるために、次のことを政府に要求する。

このことは、在日朝鮮人父兄の独自の民族的要求を充たすために、不可欠の条件となっている。

I 国庫負担による朝鮮人民族教育権の保障

II 日本人学校における民族学級の設置、民族課目の円滑な実施の保障

具体的には、

1 未公認自主学校の即時公認

2 朝鮮人児童生徒に対する義務教育権の保障

3 民族課目(朝鮮語・地理・歴史等)を正課と

して認めること。

4 朝鮮人教員の増員と身分保障

5 校舎・施設の充実

これらのことは、在日朝鮮民族の独自の要求を充たすうえに不可欠の条件であり、これが完全に実施されてのみ、在日朝鮮人子弟の教育が達成され、同時に、このことは日本の民族独立のための教育を推し進める道でもある。

日教組第四次教研大会への「報告書」を手がかりに、長々しく書いてきたのであるが、当時大阪の在日朝鮮人運動が、西今里朝鮮中学校の自主校移管という見とおしをもつことができず、その指導者が「日本の革命をなしとげないうちは祖国に帰れない。」といつているような混乱の状態の中で、日本人教師が何をしていたかを知ってほしいと考えたからである。

(ヤン ヨンフ・文学部非常勤講師)

連載

研究余滴 象徴主義 8

第3章 象徴主義運動

I その運動の周囲

山村嘉己

1

実際のな意味での《象徴派》ではなく、むしろ深い意味で、かれらを遙かに凌駕し、今日につよい影響をおよぼしている何人かの先達たちの足跡をあとづけてきたが、今や、その当事者たちの事蹟にふれるべき時がやって来た。しかし、その混沌とした状況は容易にその手がかりを与えてくれそうもない。不確定な足どりでも、その動きの周囲に眼を配るところから始めるしかあるまい。

《象徴主義者》たちを、「一八五〇年から六五年にかけて生まれ、八五ないし九〇年ごろ、どこそこのグループ

やカフェあるいは雑誌の事務所に出入りした彼ら」と定義したのはアンリ・ペール（『象徴主義文学』クセジユ）であるが、そのかれもまた、「彼らをいくつかの厳密な、哲学的、美学的原理に還元することは問題ではない」と、なかば匙を投げながら、それでも、「象徴派に共通する唯一の論点は、自然主義の理論が持つ教唆的な一面とその作品の汚らしさを告発するということにあった」と指摘し、「一八八〇年ごろ青年に達した世代は、神秘のない物理主義的な世界、冷厳な化学法則に支配される世界という息の詰るような観念に異を唱えた」のだと結論づけている。象徴派の好みは感受性、想像力に向けられ、

論理的、分析的な能力は否定されることとなり、「世界は私の表象なり」というショーペンハウエル（一七八八—一八六〇）の哲学が深く浸透し、何よりも自我の重視が望まれることとなった。したがって、当時支配的であった実証主義、その代表的な論客テーヌはかれらの最も排斥するものであった。

『高踏派と象徴主義』のP・マルチノは、それをもっと詳細に分析して見せている。かれはヴェルレーヌ、マラルメ、ランボーの三人がボードレールとともに実証主義精神の実現に反抗したことをあげながら、「実証主義は世界を十分に解き明かすことができる。世界を描くことができる。世界を牛耳ることができる」と信じていた。ところが彼らは実証主義者たちの説明に満足することができず、いたるところに謎や神秘や不安を見出していた。彼らが最初の警告者だったこの知的不安は、一八七〇年以後、徐々に成長して行き、一五年のうちに実証主義に對抗する一大勢力をつくりあげた。」それが象徴主義運動だと定義している。したがって、まず実証主義への反撥として、神秘が頭をもたげてくる。長らく、オーギュスト・コント（一七九八—一八五七）の敵対者として現われていたスペンサー（一八二〇—一九〇三）の『第一原理』（一八七二）が翻訳され、「不可知者」という概念

が規定された。「世界が我々にとつてその発頭に他ならぬ当の力は、全く不可知である」というのがスペンサーの主張であり、抑圧されていた宗教の領域に人々の視線は向けられて行った。

つづいて、ハルトマン（一八四二—一九〇六）の『無意識の哲学』（一八八六）が七七年に翻訳され、「何ものにも左右されない強力な主動力、無意識の心の存在によつて」はじめて世界を説明することができるとされた。さらに同じ頃、すでに初期高踏派時代からフランスに浸透しはじめていたショーペンハウエルのペシミズムがクローズ



バクストによる「半獣神の午后」のデッサン

アップされ、世界は「表象」にすぎないとするかれの哲学はこれら新しい傾向に多大の影響を与えることとなった。

「ベシミスム、行動の放棄、神秘嗜好、軽い宗教意欲、これらすべての傾向が合体し、強まる。形而上学的観念論の強い潮流がはつきりと姿を現わす」と説明しながらマルチノは、創刊当時の『サンボリスト』誌のつぎの言葉を紹介している。「客観は単なる見せかけ、むなししい外観にすぎない。それを私の好きなように変え、変貌させるのが私の仕事である。」かれも言うように、ヴェルレーヌ、マラルメ、ランボーをはじめ、《象徴派》の多くの人に共通するのはこの信念であった。

2

以上に述べたような現象は文学に限らず、音楽、美術などの他の芸術にも現われて来ていた。この芸術表現における大きな変化は、写真、建築術などの技術世界におけるいろいろな変動と合わせて、一九世紀後半の重大な問題であるが、ここではもっぱら象徴主義運動との連関において考察を進めることにしたい。

先ず音楽であるが、すでにボードレーが紹介したワグナー（一八一三—一八三三）の名が大きく浮かび上がる。

マラルメもまた尊敬の念を隠さなかったワグナーについては特に雑誌『ワグナー評論』が一八五五年からその賛歌を公にし始めている。「詩人のもっとも完全な作品とは、その最後の達成において一つの完璧な音楽であるかのような作品でなければならぬ」（一八六〇『音楽についての手紙』）というワグナーの考えはそのまま《象徴派》の理想であったが（ヴェルレーヌの「詩法」を、またヴァレリのあの有名な定義を想起せよ）、さらにボードレーが賞賛したワグナーの中の《偉大さ》と、《荘厳さ》はそのまま、無意識、神秘への興味と相通じるものであったし、またワグナーの創出した楽劇は一方ではマラルメの反撥を呼びながらも（なぜならマラルメにとっては詩が唯一完全な芸術であったのに、ワグナーは「詩句は音楽との《内密な合体》によってより明晰で深遠なものとなる」としているのだから）、当時の多くの詩人たちに衝撃的な魅惑となっていたのである。A・ポワザはそれを「その頃ワグナーオペラに足繁く通った影響で、詩人たちのなかに、いわば文学的オーケストレーションによって詩を作ろうという考えが生まれた。つまり彼らは、純然たる音楽的伴奏によって主テーマを包む方法を模索したのである。主テーマを演奏する詩句に並行して伴奏役の言葉が相伴をするわけであるが、伴奏語の選び方は、



マネ「バルコン」の一部

鳴響性や人々を豊かな夢想に誘う効果を重んじ、一見、主題と無関係な、かけ離れた事物を暗示しながら、やはりその主題と、他の漠然とした、より広い問題との神秘的な照応を表現するように配慮される。換言すれば、テーマを呑み込んで解消させてしまうのではなく、テーマに浸透し、それを延長させるような旋律的哲学的雰囲気のためにテーマを浸す方法、これを模索したのである。」と解説している。このワグナーは音楽史の上では、ドイツでは二〇世紀に至ってトマス・マンに認められるまでは

多くの議論を呼んだそうであるが、フランスではこのように早くからかなり大きな影響を与えてきたのであった。この他に、デュパルク（一八四八―一九三三）、ドビュッシー（一八六二―一九一八）、フォーレ（一八四五―一九二四）などと、ボードレル、マラルメ、ヴェルレーヌらとの関連もよく話題になるが、そのどれもがお互いにとって好ましいつながりを示しているわけではなく、とくに音楽側からは、文学の影響をあまり歓迎せず、むしろ詩人側が、マラルメや後のヴァレリのように、音楽はむしろ好敵手として注意すべき存在であると考えていたことを、H・ペールは指摘している。（ただし、その素人としての筆者の感じでは、この音楽の印象派ともいべきドビュッシーたちが、それに先立つロマン派と異なり、楽想を全体として表現するよりも、音の一つ一つを独立的にとり扱い、あるいは音のつながりの美しさを基本に置いて見られるのであるが、これは象徴派の詩人たちの言語感と根底において深くつながっていて、これをお互いの影響と考えるよりは、両者を包み込んだ当時の表現意識の変化のあらわれと取るのが適当と思われる。それは後でふれる印象派らの絵画の形式、色彩への姿勢とも通じ、かなり美学的な分析を必要とするのではなかろうか。）

絵画美術との関係に於ても、ボードレールはやはり先駆者的な役割を果たす。ドラクロワ（一七九八—一八六三）を新しく評価し、その神秘的なまでの想像力と深い批評性を賛嘆したボードレールは、さらにゴヤの幻想的な作品と、C・ギスの軽妙な現代風俗画とを併せて紹介し、その死の直前には、マネ（一八三二—一八八三）という新しい天才を発見している。「生き生きとして豊かで敏感で大胆な想像力」をもって、「現実への関心」を失わぬマネに対して、ボードレールは散文詩「紐」を捧げてその芸術的共感を歌いあげた。このマネはマラルメとつながり、いわゆる《印象派》とこの詩人たちの密接な関係がここにかがいとれる。とくにマラルメの『印象派の画家たちとエドワール・マネ』（一八七六、『月刊美術評論』——この文章は柏倉氏の『パリの詩・マネとマラルメ』による）はマラルメの詩論と微妙に結び合っているが、このはじめにマラルメは impressionist という新しい言葉を説明なしに使用すると断りながら、クルーベらが始めたレアリスムによる「官展」から外れた落選組がマネを中心に新しいグループを組織し、それがサロンよりも多くの観衆を集めて行く過程を説明し、マネの

出現は単なる新しい画家の誕生というのではなく、芸術に革命をもたらす一事件だと宣言する。それはレアリスムを標榜しながらも三次元空間を二次元の平面に翻訳するという絵画が本来的に抱えている矛盾から当然生まれる問題なのだが、結論的には「印象主義の力によって私が自己のものとするのは、いかなる場合も単なる再現よりも優位にあつて、すでに敵として存在する物理的世界の一部ではなく、一つ一つのタッチによって自然を再創造したという喜びなのである」（傍点・筆者）したがって、モネの水のようにその動きと透明感が生き生きと感じられ、シスレーの雲のようにその移ろって行く動きの状態が再現されていることがまさに自然の新しい創出となるのである。そして、柏倉氏が正鵠に指摘しているように、これはマラルメの詩と言葉に対する意識と明らかに通い合っている。

「完壁に制定された詩句とは……詩篇の中において言葉が、——もはやそれぞれ語本来の色合いを持っていないように見え、しかもそれらの語は、一色階の轉移してゆく微妙な過渡的過程の集積にはかならずと見える———そう思えるほど、互いに他の語の上に映発し合っている、ということだと思ふ。」（一八六六・一一・五、コペへの手紙）

「ルドン」海底のコンポジション



これはまさに印象派の色彩論そのものではないだろうか。そして、見逃してならないのは、語そのものを《響きと意味が何の偶然性も持たずに対応する純粹觀念の表出》ととらえようとしたマラルメの姿勢は、印象派の画家が色彩を光の美学によって解析し、再構成しようとした態度と似通い、それはまた、ドビュッシーらの音楽の印象派が、音を純粹の楽音の構成に還元し、まさに音の波動の美しさをもつばら追求しようとした姿とも相通するもので、すでにふれた此の時代の芸術的表現と、その媒体への関心の共通性への興味に強くわれわれをひきよせずにはいない。

象徴主義絵画というものに些かの疑念をもつH・ペールは印象派の努力が「色調の移りゆく様相を把握することに向けられ、広大な歴史が、神話世界の亡霊、教訓、寓意、象徴は追放されていた」と指摘しながら、むしろ印象派に反対したラファエロ前派の後継者、あるいはその系譜に属する画家たち、たとえばモロー（一八二六―一八八八）、シャヴァンヌ（一八二四―一九八）、ルドン（一八四〇―一九一六）、あるいはゴーギャン（一八四八―一九〇三）らの作品がむしろ象徴派に通うものを多く所有していたと解説している。

以下の思想・文学・芸術表現などのいろいろな流れに呼応するように、若者たち行動、あるいは風俗の上にも大きな変動が起こってきたが、かれらはいろいろな集団を作って、時にはクラブに屯し、時には小冊子を発行して自らの存在を誇示しようとした。N・リシャールの『象徴主義の曙に』（一九六一 二ゼ書店）などに詳しい紹介があるが、ここでは先ずとりあえずその集団の名前を列挙してみよう。L'Hydropathe（一八七八―八一 水呑集団）、Les Hirsutes（一八八一―八三 蓬髪派）、Nous Autres（一八八一―八三 われら別派）、Le-m-en-foutiste（一八八四―八五 どうつでもいい派）、Zutistes（一八八三 勝手にせい派）、Le Chat Noir（一八八一―九七 黒猫）、これら学生、画学生、文士たちの小集団は、あるものは革命的、進歩的社會主義に共鳴し、熱狂的な政治思想を唱えるかと思えば、あるものは政治や金や俗世間の出来事一切に背を向け、ひたすら情熱や感性の高揚につとめたりした。中でも、一八八二年一月創刊の『新左岸』（後に八三年三月『Luceet』と改題）八四年五月創刊の『独立評論』は、少々の主張の違いはあっても、かなり嬌激な政治・社會思想を宣伝していた。



「イドロパット」第1号

ただかれらの中では文学の新しい傾向への強い情熱はあまり見出されないのが特徴である。

また、これらの小集団のいくつかが、たとえばイドロパットはその名の四ページのパンフレットを（主幹はE・Goudéau）さらに右岸の人々をも併せて八ページのTOU PARIS（『全パリ』主幹はグードオ）を出し、「黒猫」は八二年一月に、その名のパンフレットを出している（これも初めはグードオが主宰）が、この「黒猫」の八三年五月―八月にヴェルレーヌのいくつかの詩が発表され（後に『昔と今』に収められたもの、この中に『Langueur』



E・グードオ

が含まれ、この詩の中のことば decaden が必要な意味をもつてくる)、その他の詩人(たとえばモレアスなど)の作品も見られて、ようやく文学色も表われて来る。マルチノはこの辺の事情を含めて「ヴェルレーヌはローマ帝国衰退期のイマージュを喚起しながら、おのれの「悲哀」を、行為への嫌悪感を、人生は生きるに値するものは何ひとつないという確信をそこで表明している。J・ラフォルグは一八八二年の初めにすでに、若者たちの精神状態を特徴づける賛辞としてこの言葉を使った。事実、デカダン派の傾向は、彼らを包んでいた状況の傾向と同様に、文学的というよりは遥かに多く哲学的傾向だったのだ。象徴主義は「無制限自由主義運動」であり、「社



「全パリ」80年5月号

会哲学」として「無政府社主義」をもたらしたという主張がしばしばなされるが、この評価はむしろ「デカディズム」に対して厳密に当てはまる。」と述べながら、結論的に、つぎの一八八六年四月一〇日の『ル・デカダン』誌のことを紹介している。

ショーペンハウエル風文化の超無感覺主義から生まれたデカダン派は、単なる文学流派ではない。デカダンの使命は建設することではない。ただ破壊し、旧弊を打倒しさえすればいいのだ。……

われわれが到達した類^{デカダンス}廃状態を認めまいとする態度は愚の骨頂であろう。宗教、風俗、正義、すべてが類廃しつつある。……社会は潮解性文化の腐食作用のもとに風化しつつある。現代人は感覚がずさんでいる。欲望、感覚、嗜好、奢侈、享楽などの洗練、神経痛、ヒステリー、催眠術、モルヒネ中毒、化学的シヤラタニスム、徹底的なショーペンハウエル主義、これらは社会の進化の前駆徴候にほかならない。

マラルメも、ヴェルレーヌもまさにこの時期に脚光を浴びたので、マラルメは単なる「^{サシニスム}感覚論的」詩人（パレス）であり、ヴェルレーヌの中で若者たちが愛したのは「暗示、半濃淡、彼方の追求、魂の明暗」であった（ブルージェ）のである。この混沌のなかで、いわゆるデカダン詩人としては、ジュール・ラフォルグだけが際立った存在ぶりを示すことになる。（ラフォルグについては次回で紹介する。）

（やまむら よしみ・文学部フランス文学科教員）

投稿募集のお知らせ

読者からの投稿をお待ちしています。

最近読んだ本の書評、内容紹介、批判等の作業を通じて、自己の主張を述べたもの、現状分析、研究成果の発表、論文も結構です。

詳細については、生協本部3F『書評』編集委員会までお問い合せ下さい。

【送り先】

〒565 吹田市千里山東3-10-1

関西太学生活協同組合本部3F組織部内『書評』

編集委員会

☎06-387-9998(直通) ☎06-388-1121(内線4821)

連
載

日本中国ことばの来往ゆきまき

その44

“漢字統一”へのアドバルーン

芝田 稔

“漢字統一”へのアドバルーン

近着北京発行の『漢字文化』（季刊誌・九一年第三期）によると、北京に「海峡兩岸書同文促進会」という学者・教育者の研究会が生まれようとしている。これはその名称のとおり、中国と台湾の漢字統一を促進することを目的としている。

この提唱者は「北京国際漢字研究会」会長であり、『漢字文化』雑誌社社長の袁曉園教授である。袁女史は九一年三月北京で開催された「漢字是科学、易学、智能型、国際性的優秀文字」學術座談会（科学的な、学

び易い、智能タイプの、国際性のある優れた漢字”の學術座談会）の開催挨拶でこれを提案している。この座談会には国家教育委員会と北京市当局の指導者が参加しているし、中国の著名な文字学者や教育者等一四〇余名が参加していることから見て、袁女史が提唱した促進会は、単なる好き者同士の会とは思えない。これは少くとも間近かに迫りつつあるホンコン、マカオの中国への帰属復帰を見通しての布石ではないだろうか、と思われる。

香港、マカオでは今尚台湾と同じく旧漢字を本字としている。現在漢字の文化圏を見ると、ホンコン、マカオや台湾、さらに東南アジア（但しシンガポールは漢字の

簡略化を採用している)、欧米の華僑はもちろんのこと韓国、日本も概ね同一漢字の圏内に在って、中国現行の簡略化漢字とは疎通を欠いている。これが実状である。「中国人の手紙が読めなくなつた」とか「中国の新聞や書籍は漢字が變つて読めない。香港や台湾のものならなんとか……」という声をよく耳にするのはその証拠である。「物事は究極に達すると必ず逆の方向へ転化する」というが、ここに来て「書同文」(書ハ文ヲ同ジクス、文は形を指す。漢字の字形を統一すること)という古語を引張り出して「漢字統一」を叫び始めたのは何故か、筆者が得た偶然の体験からその背景を述べてみよう。

一九八七年八月北京北郊の西三旗飯店(ホテル名)で開催された「第二回世界漢語教學討論会」に参加した時のことである。このシンポジウムに出席した時、私はその三月に本学を定年退職していたので、全くフリーの立場で参加していたのであるが、この大会を主催した「世界漢語教學学会」理事の一員であったので、開会式には議長壇に席を与えられ、且つ外国人代表として祝辞を述べる機会も与えられたのであった。そんなことが影響したのかも知れないが、会期中に報道関係者から所見を聞かれることが度々あった。その一つに「中国の簡体字を

どう思うか」「日本での簡体字に対する影響は？」といった質問があった。

解放後中国では逸早く「文字改革」と取り組み、遂に語音・語彙・語法を統一する共通語、漢字の簡略化と漢字を読むためのルビ用としてローマ字による「漢語拼音字母」(中国語表音字母)を制定した。漢字の簡略化については次の方法を採用している。

- ① 古文字または古くからの異体字——个(個)、万(萬)、学(學)、体(體) など。
- ② 筆画の一部だけを使用するもの——广(廣)など。
- ③ 偏や旁の字形を省略し画数を減じたもの——言、食、金へんなど。
- ④ 会意の造字法を応用したもの——「陰、陽」を、こざとへんに「月、日」、「塵」を「小土」を一字にしたものなど。
- ⑤ 形声の造字法を応用したもの——「遠」を同音の「元」にしんにょうをつける。「態」は「太」の下に「心」をつけるなど。
- ⑦ 草書体を楷書風にしたもの——東、書、専などの簡略。
- ⑧ 字形の一部を簡略にしたもの——「漢」を、さんずいへんに「又」。「難」を、「又」と「隹」にする



など。

以上の漢字簡略化法によって一九四九年から十五年目の六四年三月に至り、総数二五四八字の簡略化が正字として発表されている。

中国の漢字簡略化は、中国の歴史的、政治的、社会的、文化的各方面からの必要に迫られて、中国自体のものとして独自に行われたものであって、他から口出しする筋

合いのものではない。たとえ希望を提起したところで、それを取り上げられるような国際情勢ではなかったのである。日本でも中国の漢字簡略化が具体的に進み、一九五六年三月第一次正式に三五二の簡略字が発表された時、一部漢学者から日中共同で作業を進めてはどうか、という意見が出されたことがあった。しかし当時は、日本にも中国にもそのような文化的事業に手をつける糸口さえ見出せなかった。日進月歩、中国の漢字改革はあれよあれよと、見ているうちに遠い彼方まで行ってしまったのである。このことは同じ漢字を使用しながらも、文化交流の面で一つの障害になっていることは確かに事実である。

だがわれわれ中国語学を専攻している者の立場からいえば、本来中国の文章であるものを、日本語で読み下しその意味を理解して来たことは、全く日本人の智慧が為した技であり、至極く便利ではあるが、それ自体は変則である。中国文は中国語として読んでこそ正面まともな在り方ではないだろうか。何れにしろ、中国が漢字の欠点を補う目的で、簡略字を正字としていることを非難するに当らないし、中国ではすでに四〇歳以下の人なら全て簡体字で教育を受けてきたのである。今更「人民日報」を旧漢字で発行してほしいなどと強く申し入れる考えのない



旨を答えておいたのである。

ところが海外華僑、特に米国から来ていた人たちには強硬な論者が多かったことは事実であった。

もう一つは「中国青年報」国際部の記者から意外なことを頼まれた。旧漢字で「漢」という字を書いて欲しいとの依頼である。今回のシンポジウム特集のカットにしたいといつて筆視まで用意されると断るわけにも参らない。恥を覚悟で承諾したのであった。このカットは後日同紙に掲載され、帰国後その依頼記者から送付されてきた。

シンポジウムでこの二つの体験には後日譚がある。例のカットの関連からいえば、浙江省黄岩県教委および、同省臨海市、上海市の個人から計四通の「漢」を通じての交流を呼びかけてくれたことで、以来今日も細々ながら交流関係をつづけている。もう一つは翌年の八八年一月一日付から「人民日報」が本紙とは別個に、旧漢字による「人民日報・海外版」を発行したことであり、同紙は今日日刊紙として健在である。

今にして思えば八七年八月、あのシンポジウムの時には、すでに旧漢字を復活する心の準備ができていたのかも知れない。もちろん全面復帰など考えられないが、せめて海外華僑のために、またホンコンやマカオ住民のためにも「海外版」を通じて疎通を計ろうとしていたので

はないだろうか。海外華僑の要望を容れて「海外版」の発行に踏み切つてから九四年が過ぎた。そして今、さらに一歩進めて「中・台間の漢字統一」の芽が萌え出ようとしているのである。

さて、漢字は「科学的な、学び易い、智能タイプの、国際性のある優れた文字」である、という論拠がどこにあるのか、袁女史の講演からその要点を拾つてみよう。

一 智慧の創造。漢字は一字で一音一義を備えており、表音文字とは根本的に異なる。千年も不変の音はなく、形も不変であり得ない。表意文字にはたとえ民族が異つていても、共に知り合う便がある。

二 新語創造の便。単音字を用いて双音詞を構成し、新語を創造するのが便利である。書の関連語として書架、書庫、書生、書体……。したがって文章が簡潔で短かい。国連本部の書類は、英・仏・露・西・中五ヶ国語で作成されているが中文の書類は最も薄い。

三 古今、東西に通ず。世界各国で千年以前の文を読める人は一般にはいない。英語では三百年以前なら専門家以外は読めない。中国では児童でも二千年以前の漢劉邦の「大風歌」を朗読することができる。

四 漢字は中国第五番目の大発明。漢字は学び易く覚え易い。例として石井勳博士の研究実験の成果および天津での幼児識字実験の成果を参考。

五 漢字の芸術性。漢字による児童教育を推進して中華文化の高揚を計る。

六 「書同文」を実現しなければ、中国は千百の酋長国になる恐れがある。

七 台湾は旧漢字、大陸では三千字近くの簡略字を使用している。簡体字は海外に出ると読める人が少ない。「人民日報・海外版」はその欠点を補っているので大へん良いことである。

以上の論拠から中国・台湾の漢字統一へのアドバルーンを掲げているのである。



注

- ① 袁曉園 学者の家庭に生れ、フランス留学で経済学を学び、後パリ大学で言語学を研究。帰国後外交部に入りカルカッタ副領事となり華僑の文教を主管す。戦後国連本部に勤務、表音文字と漢字の比較研究を進め、一九七四年女史の論考が周恩来総理に認められ、招聘されて国内の十一大学で講演、三大学から名誉教授の称号を贈られた。八五年アメリカ籍を放棄して帰国、現在北京に「曉園語文・文化科学技術研究所」「漢字文化」雑誌社および「曉園中医院」を設立し、漢字文化の高揚に努めている。「漢字文化」は一九八九年に創刊され、一貫して漢字の優越性を主張している。
- ② 漢高祖が故郷沛（現在の江蘇省沛県）に立ち寄り村人を集めて酒宴を開いた際、即興で作り自ら歌ったと伝えられる詩。「大風起兮雲飛揚、威加海内兮掃故郷、安得猛士兮守四方」（しばたみのる・元文学部教員）

投稿募集のお知らせ

◎投稿募集

読者からの投稿をお待ちしています。

最近読んだ本の書評、内容紹介、批判等の作業を通じて、自己の主張を述べたもの、現状分析、研究成果の発表、論文も結構です。

詳細については、生協本部3F「書評」編集委員会までお問い合わせ下さい。

して下さい。

▼原稿は返却しません。必要な場合はコピーをとって置いて下さい。

▼送り先

〒565 吹田市千里山東3-10-1

関西大学生協同組合本部3F組織部内「書評」編集委員会

☎387-9998 (直通)

☎388-1121 (内線4821)

◎投稿規定は以下の通りです。

▼原稿は原則として縦書きで、「書評」誌用の字数、一行二五字、二二行(二五〇字)を一枚と計算します。

▼枚数は自由。(ただし編集上の都合で何回かに分けて掲載することもあります。)

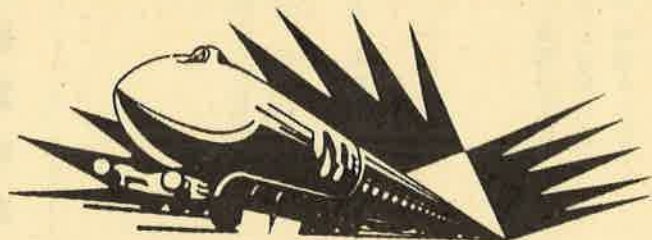
▼締め切り各月末日。

▼原稿には住所、氏名、学籍番号、電話番号を必ず記入

「書評」編集委員

スタッフ大募集!

～教育文化活動という視点から、日々の世の中を
見据え続けています。～



私たちのやっていることは
可能性への挑戦なんです。

(活動内容：編集会議・各種テーマの学習・討論会)
編集作業・文章の執筆 etc.

興味が湧いたら

いつでも下記までご連絡下さい。

関西大学 組織部「書評」編集委員会
(生協本部3階上る)

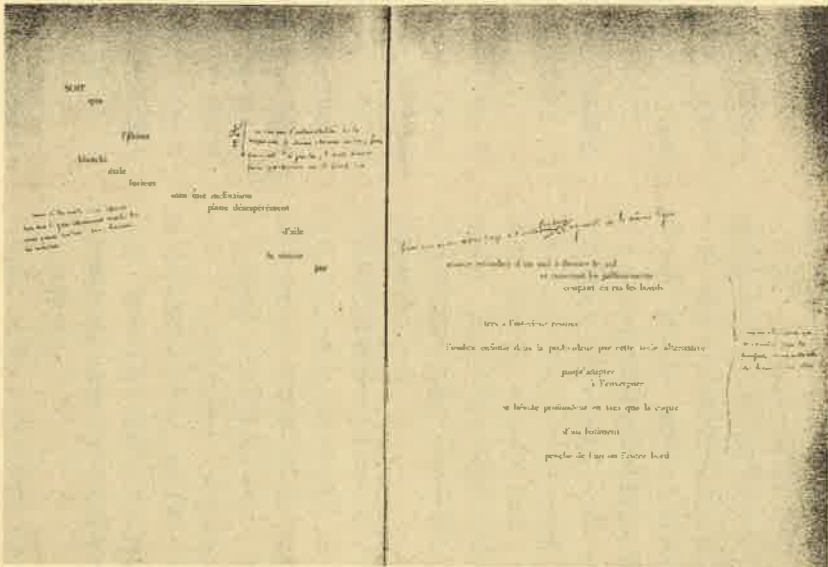
TEL(06)387-9998 (直通)

おわびと訂正

「書評」 98号、連載《研究余滴》

象徴主義 第2章 象徴主義の先駆者たち

IV ステファヌ・マラルメにおいて、48ページ「骰子一擲」の実際」の写真が上下逆になっていました。つっしんでおわび申し上げます。



「骰子一擲」の実際

■短評■

デモと自由と好奇心と

福 富 節 男

第三書館／定価二〇六〇円
(消費税込)

最近、様々な運動体（市民・学生問わず）の中で、『従来の運動スタイルではダメだ』という意見が多い。それは、私にもよく理解^{わか}る。

八〇年代まで、「風景」あるいは「日常」となりえた、運動スタイル、闘争スタイルは、九〇年代の現在において、ほぼ「非日常」へと変わりつつある。関西で言えば、大阪は御堂筋、京都は河原町通りでのデモンストレーション（以下デモ）、ピラマキ、

シユプレヒコール。一方、国家権力やマスコミは「過激派」キャンペーンをくり返し、我々は、そのキャンペーンに打ち勝つ中身を持ち切れていない。「運動Ⅱ」内ゲバ・ヘルメット」という大衆のイメージを凌駕する理論と説得力がないのである。

もう一つの大きな問題は、大衆へのアプローチの仕方である。先程、八〇年代の「日常」は、九〇年代の「非日常」へと変わりつつあることを述べたが、だからといって、「デモ」を「パレード」に、「アピール」を「あいさつ」に変えたからと言って、一体どれ程の意味があるのだろうか。

言葉尻を変えただけで、「運動の質」は変らない。

何とかしなければならぬとは思っても、今の小手先だけの「変化」は、その「思い」にびつたりくるものではなかった。

悶々としている私に、衝撃を与え

たのが、本書「デモと自由と好奇心と」である。

本書では、著者である福富節男さんが、様々な所で発表された文章を集めたものである。福富さんは、「ベトナムに平和を！ 市民連合（以下ベ平連）」の活動家であり、数学者でもある。彼自身の歴史、軍隊に居たこと、樺太に居たこと、そしてベ平連の活動家として歩んでいる事が書かれている。

私の気持ちに響いてやまないのは、後半の「共同行動と自由」「教育と自由」である。ああこれを言いたかったんだ（私は）、と思う文章によく出会う。「デモは誰にでもできる。

デモによる表現は文章表現より粗く、詳しく、精密さ、豊かさでは劣る。しかし誰でもが意見の表明に参加し、協力できるところに特色がある。」デモは、あくまでも表現の手段であり、目的ではない。そして、現在の

に見て、目立ち、不特定多数の参加が可能なのは、やはりデモだ。漠然としていたデモの意味が自分にとってハッキリしてくる。

しかし一方では、自分の不十分点として、痛いところが突かれる。

『ところで街を行く人に聞いてもらうための話をするのに、屋内での講演会のように延々と一〇分も一五分も、時には三〇分も演説する人がいる。(中略)人の耳をそばだせるか、そうでないかが計量できぬほど主観性の塊で、観念的ではとても事態を打破などできるものではないと思う。』

いわゆる「アジ(テーション)口調」は、集会では聞いてもらえても、街頭では耳を傾けてもらえないことはない。市民の日常の言葉でないからだ。「正しい事を言っていれば、大衆はついてくる。」これは真であり、また嘘でもある。「聞いてみよう。」

という気を大衆に起こさせられない言葉は、どんなに正しくても、大衆の気持ちの中へ入って行かない。今、我々運動の側の言葉は大衆の気持ちの中へ入っていない。入っているのは企業であり、資本の言葉なのだ。そしてそれが、結果的に、我々の、そして大衆の活動領域と、考え方を、奪っているのである。

若干、話の筋が、デモ達の演説だのといった具体的な話にのみ集中しているが、これはほんの序の口、一部であって、本書の全てではない。

運動とは一体何なのか、私は運動の中で何を実現しようとしているのか。本書を読み終えたあとで、私の前には様々な課題が湧いてくる。

私が運動に関わり出して数年になる。そして、大学を卒業しても、運動を続けようと決めている。その「運動」は、結局は一人でなんてできるものではなくて、他者と一緒に他者

を巻き込みながらでしか、できない。どれだけ多くの人と共に行動できるか、といった事を考えながら、色々な事を考えながら、色々な運動をずっと続けて行きたいと思った。

まだまだ、変えていかなければならない所が、運動にも、社会にも、沢山、あるのだから。

(社会学部四回生・山本 亮)

新入生 歓迎 講演会

Part1.

★★★★★★★★★★

大学のコンピュータ管理を問う

講師：池野高理氏(大阪経済大学教員)

日時：5月13日(水) 組合員無料

Part2.

★★★★★★★★★★

足元からの国際化

講師：水野阿修羅氏(アジアフレンド)(交渉中)

日時：5月28日(木)(予定) 組合員無料

関西大学生生活協同組合組織部

〒565 吹田市千里山東3-10-1

TEL (06)387-9998



新入生大歓迎!

ボクらはコレで

「大学生になったんだ」って実感したんだ!

〈ちょっとだけ先輩の私たちや先生と一緒に話しをする機会なんて、そうめったにある〉
〈もんじゃない。さあ、大学生生活は新歓セミナーからスタートしよう!〉

この春、関大生協組織部が贈る

新入生歓迎セミナー

第2回

国際化から見えてくるもの

4/11(土)~12(日)

at 京都伏見

(講師) 小川 悟(文)

山村嘉巳(文)

他

第3回

高校教育に物申す

4/25(土)~26(日)

at 奈良橿原

(講師) 石元清英(社)

他交渉中

申込要領

〈しめきり〉各回先着30名 〈参加費〉2,500円(一切の費用を含む)

〈申込方法〉下記の申込用紙に所定事項をご記入のうえ、生協組織部までご持参されるか、または郵送にて申込んで下さい。(参加費は当日持参)

〈お問い合わせ先〉06(387)9998

キリトリ線

新入生歓迎セミナー申込用紙

内に○を入れて下さい。

第1回
キャンパスライフを考える

第2回
国際化から見えてくるもの

第3回
高校教育に物申す

フリガナ	
氏名	
住所	
TEL	
学部	
学科	

編 集 後 記

八〇年代後半から引き続いて起こった「終焉」現象を私たちは今どう捉えるのか。そのことが現在問われている気がしてならない。

東欧諸国あるいはソ連邦で起こった社会主義の「終焉」。いや、わが国においては「昭和」が「終焉」を告げており、ある種の形容しがたい終末感が世紀末の到来と奇しくも符合するかのように語られ始めている。

ある作家などは、この今日も明日もわからない状況において、いっさいの思索を排除して、「歴史上の転換点」を日記に綴るといふ行動をとっている。彼に言わせれば、「歴史的終焉」の予感は今や日常に蔓延しており、日記という行動は「追憶のための準備」だったらしい。

「終焉」が時流として受け止められれば、内省のために立ち止まる作業なくして、ただただ時流に呑まれていってしまうという危うさがここには潜んでいる。

本誌が昨年、「特集・湾岸戦争を問う」を世に上梓した当時もそんな渦中にあり、戦勝国ムードに酔い痴れる米国が主導権を乗っ取った形で、「新世界秩序」が模索され始めた。日本の対応は、「国際貢献」という言葉にただ乗っかっただけで、情勢適応の姿勢に終始していたに過

ぎない。

さらに最近、生ぬるい米国追従型姿勢からの脱却が米国への反発といったムードに変貌しつつある。こうした日米対立の構図が「アジア主義」にとつて変るうとしているのだ。「アジア主義」を唱える者たちは軍事大国への正当化を抱えている。

昨今の状況はもはや追憶の余地を与えてはくれないほどの凄じさである。しかし、私たちがあえてしなくてはならない作業が、歴史的な転換点に立ち帰り、「時代」状況を的確に捉える物の見方、考え方を作りだしていくことである以上、「書評」誌の役割は大きいかと思う。「終焉」が時流だとすれば、その時流に身を任せるほど恐いものはない。今後の引き続き「書評」活動が全ての人に開かれた論議の場所として、そして情況に対する私たちの見解（アピール）となりえた時、「書評」活動の成果として評価できると思う。

——「書評」誌は次号で一〇〇号を迎える。(H)

〔今号から、池田浩士氏の連載「故編追望」が開始される予定でしたが、現在多忙な日々を送られており、次号には必ずのこと。首を長くして期待されている皆さん、もう少しの我慢です。〕

季刊『書評』 1992年4月 通巻99号

編集・発行 関西大学生協同組合・組織部「書評」編集委員会
連絡先 吹田市千里山東3-10-1 (☎388-1121 (内線4821) or 387-9998)
頒 価 250円